The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フランス人民党1936-1940年(1)
Author(s)	竹岡, 敬温
Citation	大阪大学経済学. 2013, 63(2), p. 50-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57004
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フランス人民党 1936 − 1940 年（1）

竹　岡　敬　温†

1. フランス人民党の結成

フランス人民党（Parti populaire français）が結成されたのは，1936 年 6 月 27 − 28 日，サン・ドニ市役所の宴会場で開催された「サン・ドニ地区多数派」の会議の 2 日目であり，人民戦線内閣が成立してわずか 3 週間後のことであった（人民戦線政府によって，6 月 18 日，すべての極右同盟が解散させられたあと，フランソワ・ド・ラ・ロックを委員長とする最大の極右同盟であった火の十字架団の後継組織，フランス社会党Parti social françaisの結成コミュニケが発表されたのは，その数日まえの 6 月 24 日であった）。

その日の午後，ドリオは 3 時間に及ぶ演説をおこない，「サン・ドニの集い」に集まった 1,000 人余の聴衆を熱狂させた。

ドリオは，張りつめた声で早口に語りつづけた。かれは，部厚いメモに頼って，言いよどんだり言葉を探したりすることもなく，かれの考えを詳細に語った。会議に出ていたジャーナリストたちを驚かせたのは，かれの話し振りであった。会場の笑いを巻き起こすような，面白い言葉も冗談も，聴衆へのウィンクもなかった。緊張と信念のほとばしりによってときに叫びに似た声をあげることはあっても，終始，かれは，厳粛ともいえるほどのきわめて真剣な態度を保ちつづけた。

ドリオは，まず，かれとかれの友人たちが，階級闘争の理論にもとづいて，革命をめざして行動するひとつの党のみが民衆に解放をもたらすことができる，と長いあいだ信じてきた過去を語り，しかし，「今日では，この方式，この教義を変えなければならないとおもうようになりました」とのべた。かれは，著作家たちの文章を長々と引用し，多くの統計をよりどころにして，ソヴィエト・ロシア社会の発展を分析し，そこでは一時消えていた社会的不平等と階級搾取が別のかたちでふたたびあらわれていることをあきらかにした。

この点にかんして，ドリオはレーニンやスターリンを激しく非難することは控え，その失敗の鍵はマルクスとエンゲルスの理論にあると考えて，つぎのように語った。「あなた方がまだ若く，社会生活の経験があなた方の肌をまだ日焼けさせていないときにマルクス，エンゲルスの著書を読むと，あなた方はその華麗で壮大な推論に心を奪われてしまうことでしょう。しかし，つぎには，あなた方が人生の奥深くにはいり込むにつれて，あなた方がたんなる観察者であろうと，社会の指導的地位についていようと，とてもよく研究されたこれらの理論が人間的要素を忘れ，人の本性や人びとのあいだの能力の大きな不均等をすこしも考慮していないことに気がつくことでしょう。マルクス主義のきわめて重要な誤りは，経済環境が社会環境を完全に規定し，人間はその経済環境の排他的な産物であると信じていることです。けれども，この主張は部分的にしか真実ではありません。経済環境から受ける衝動のほかに，人間はいくつかの自然の法則に従うことを考慮に入れなければならないからです。」それは，マルクス主義

† 大阪大学名誉教授

の「修正」というよりは「否定」であった。こうして，ドリオはソ連における社会主義の実験は破綻したと主張し，フランスではそれをまねるべきではないとのべたのであった。

さらに，ドリオは，ソヴィエト・ロシアが社会主義から遠ざかるとともに，ナショナリズム国家になったといい，その結果，最初は「恐ろしい事態の再来――すなわち戦争――に反対する保証」の役割を担う機関のようにおもわれた第３インターナショナル（コミンテルン）はいまや「成立したばかりのソヴィエト・ナショナリズム国家の対外政策を宣伝する手段になろうとしている」，「第３インターナショナルの一方方向の国際主義はもっぱらソヴィエト国民だけの利益に役立つようになっている。それは憎むべき欺瞞であり，それだけではなく，その影響下にある国にたいする重大な犯罪である」とのべた。そして，「スターリンの奴隷であるフランス共産党員たちが，この一方方向の国際主義の名において，かれら自身の国とフランスの労働者たちの利益に反する浅ましい役割を演じているのはそのためであり，かれらがいくら自分たちを愛国者に見せかけようとしても無駄であり，いくら三色旗を味方につけても，いくら“ラ・マルセイエーズ”を歌っても無駄である。かれらは外国のナショナリスト某国家の危険な道具でしかなく，それ以外にはなりえない」と主張して，コミンテルンとフランス共産党を糾弾した。

最後に，ドリオは，1936 年 6 月末時点のフランスの状況分析をおこない，とくに，1936 年 5 － 6 月の坐り込みストライキの全国的波及によって引き起こされた社会的騒乱について語り，その真の責任者であるフランスの指導的政治家たちと大ブルジョワジーをきわめて厳しい言葉で批判した。かれは，ストライキ参加者たちの要求事項に同意しながらも，しかし，「かえって事態を悪化させる下手な打開策」になるおそれがある週 40 時間労働については，「このように重要な改革は，十分に分析され研究されて，すべての人びとを満足させるように漸進的に適用されるべきであり，中小製造業にとって，とくにフランスの労働者階級の大部分にとって，致命的になるかもしれないようなやり方で適用されてはならない。この点については，われわれは，もっと分別をもって，もっとよく研究し，もっと柔軟に適用しなければならない」とのべて，その急激な適用に警戒を呼びかけた[1)]。

ドリオは，とりわけ，結成されようとしているフランス人民党について語り，この新しい党は「2 つの敵をもっている。ひとつは国内外における社会的保守主義とその旧幣な精神であり，もうひとつはスターリンの党とその国民的退廃の精神である」とのべている。そして，フランス人民党は，技術進歩の恩恵を受けなければならない労働者階級の幸福のために，同様に農民の幸福のためにたたかい，また，社会組織の安定を保証する中産階級の保護のためにはたらき，「すでに十分に働いた年取った世代を労働の負担から解放して，余生を平穏に生活できるようにし」，「将来に不安を抱いている数十万の若者たち」がただちに経済，政治活動にはいれるようにするためにたたかうであろう，と主張した[2)]。演説ではばくせんとした無難な表現にとどめられたが，フランス人民党結成大会の後で，党の綱領が発表されることになっていた。

「サン・ドニの集い」が終わってから採用されたフランス人民党のマニフェスト[3)]は，ドリ

---

1) 週 40 時間労働法の適用については，*Léon Blum chef de gouvernement 1936-1937*, Armand Colin, Paris, 1967, 2e partie, pp.207-325; 竹岡敬温『世界恐慌期フランスの社会－経済　政治　ファシズム－』御茶の水書房，2007 年 , pp.241-265, 389-448 参照のこと。

2) Jean-Paul Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme*, Editions Balland, Paris, 1986, pp.210-212.

3) Jacques Doriot, *La France ne sera pas un pays d'esclaves*, Les Œuvres françaises, 1936, pp.149-155; *L'Emancipation nationale*, 30 juin 1936.

オの演説を踏襲し，「われわれの党はナショナルであるとともに社会的である」，「社会的で革命的である」と主張し，つぎのような諸点を強調していた。国家の改革，すなわち，国家の諸制度と行政が金融権力にたいして完全な独立を保ち，断固とした政治的指揮権を行使し，社会紛争においては調停者の役割を演じ，経済的，社会的変革の手段となるように改革すること。各種職業（「同業組合〔コルポラシヨン〕」という語は使われなかった）の代表からなり，各分野で設定された「計画」に従って生産と消費を発展させることを任務とし，生産活動によって提起される社会問題をすばやく解決するための経済会議の創設。「国民の真髄を構成する」中産階級の擁護。「強く健全な民族を生み出すことができるように」公教育，とりわけ職業教育，スポーツ，交通機関，都市計画，公衆衛生の発展，住居の改善。とりわけ植民地に本国の補完的経済をつくりあげることによって，世界におけるフランスの影響力と平和維持の役割を強化すること。

フランス人民党の誕生は電撃的であり，党勢の拡大は急速であった。公表された数字は相当割引いて考えなければならないとしても，同党の週刊機関紙『国民解放』――サン・ドニ地区の共産党機関紙『解放』は，このようにタイトルを変えて，フランス人民党の機関紙となった――の発表によれば，党員数は1936年7月11日には1万5,000人，8月1日には5万人，10月30日には10万1,255人，11月28日には12万人にのぼった[4]。同紙の主張によれば，その1号と2号（1936年7月4日と11日発行）は，パリ地域だけで25万部売れたという。ドリオは，なによりもまず，パリとその郊外に堅固な組織を築かなければならないと考え，幾度も大きな集会を開いて，多数の参加者を集めた。7月11日にはパリのヴァーグラム会館で公称1万2,000人（実際は3,000人から4,000人であったろう），11月31日には冬季競輪場で3万人（おそらく8,000人から1万人）の出席者を集めたという。こうして，ドリオは「サン・ドニから出る」ことに成功した。

パリ地域では，ドリオの警護隊は共産党の対抗デモを阻止するのに成功したが，しかし，地方では，反対に，フランス人民党の集会は往々，共産党との激しい衝突を引き起こした。そのなかで，マルセイユは例外であった。マルセイユでは，7月27日，シモン・サビアーニの集団が共産党の活動家たちの攻撃を断念させることに成功した。

1888年，コルシカで生まれたシモン・サビアーニは1914－1918年の大戦の英雄であり，一度兵役免除になっていたにもかかわらず，かれは退役を記載した軍人手帳のページを破って戦争に身を投じた。大戦中，かれの3人の兄弟は戦死したが，かれ自身は少尉に昇進し，重傷を負って片目を失い，その勇敢な行為によって4度軍から表彰を受け，戦功十字章とレジオン・ドヌール勲章をあたえられた。1920年にフランス共産党が結成されるや，かれは同党に入党した。しかし，1923年には同党を離党した[5]。しかしながら，かれが社会党（SFIO）を激しく批判しつづけたために，その後も多くの選挙で共産党の支持を受けることができ，1925年には，マルセイユの選挙区で県会議員に選ばれ，ついで1928年には，共産党候補の異例な

4) *L'Emancipation nationale*, 11 juillet, 1er août, 30 octobre et 28 novembre 1936.

5) シモン・サビアーニがフランス共産党を離党した年次をディーター・ヴォルフとロバート・サウシーは1922年，ジャン・ポール・ブリュネは1923年としている。Dieter Wolf, *Doriot. Du communisme à là collaboration*, Arthème Fayard, Paris, 1969, p.181, 平瀬徹也・吉田八重子訳『フランスファシズムの生成　人民戦線とドリオ運動』風媒社，1972年, p.189; Robert Soucy, *French Fascism: The Second Wave, 1933-1939*, Yale University Press, New Haven and London, 1995, p.234, (traduction française) *Fascisme français? 1933-1939. Mouvements antidémocratiques*, Editions Autrement, 2004, p.330; J-P. Brunet, *op. cit.*, p.214.

立候補辞退のおかげで，マルセイユ選出の代議士に当選した。任期満了の社会党（SFIO）代議士と選挙を争うサビアーニの社会党（SFIO）攻撃が，共産党から高い評価を受けたためであった。翌 1929 年には，マルセイユの市会議員選挙でも，激しい選挙戦の結果，サビアーニは勝利した。

1930 年以後には，ナチズムの台頭がサビアーニにとって強い強迫観念となり，負傷した退役軍人の愛国心はかれの社会主義をしだいにナショナリズムの方向に向かわせ，その結果，人民戦線の敵対者となったかれは，1931 年に，当時かれが加盟していたプロレタリア統一党（PUP）から除名された。さらに，ドリオの共産党への反逆が，サビアーニのその後の変化を加速したようにおもわれる。1934 年 3 月 31 日，マルセイユのアルカザール劇場で開かれた大集会で，はじめて，かれは「左翼でも右翼でもなく，なによりもまずフランス第 1 に！」という有名なスローガンを呼びかけた。「インターナショナル」を歌うことは，まもなく，かれの「社会主義・共産主義連合」の集会では禁止された。それ以後，かれは，その演説や論説のなかで，いつも，国家的枠内での社会主義の建設を主張しつづけた。かれは，1929 年にはマルセイユ市の第 1 助役になっていたが，1934 年 10 月の郡選挙でかれの「フランス戦線」が敗北したあと，マルセイユ市内の壁にフランス国旗と同じ 3 色に印刷し，つぎのような文章を書いた大きなポスターを貼らせた。「真の社会主義の理想に深い愛着を抱くわたしは，本当は，道義的観点からいっても，共同戦線の名の下に，わが国の文明の破壊をもくろむために集まった人びとと手を組むよりも，わたしの祖国を守ろうとする人びとととともにいたい。たとえ，かれらが火の十字架団の団員であろうと[6]。」

しかし，サビアーニの行動には，きわめて疑わしい点もあった。マルセイユでは，政治的目的のためにごろつき仲間を利用する習慣があったが，この点で，かれはその先行者や競争相手をはるかに凌賀していた。1930 年には，かれは，カルボンヌという名の友人のやくざ仲間の賛同をえて，その頃まで，「シモン一味」とか「カルボンヌ一味」とか呼ばれるにすぎなかった集団の名称を「プロレタリア軍団」と変更した。この「軍団」は，港のいかがわしい酒場などで集められたアウトサイダー，船乗り，港湾労務者，レスラー，コルシカやイタリアからの流れ者，それに，まったく放埒な生活を送る失業者たちから構成され，注文姿第でどこにでもいき，いつでも殴り合いに加わったり，ピストルを撃つつもりができている手強い警護組織であり，「狂信的で，どんなことでもする親衛隊」であった[7]。サビアーニは，政治的キャンペーンのときには，レスラーやマルセイユの暗黒街の犯罪者も加わった，これらのボディ・ガードに取り囲まれていた[8]。

サビアーニは選挙の裏工作にも長じ，1929 年に第 1 助役のポストについて以来，その種の得意な手を使って市長になった。しかしながら，その頃すでに「サビアニズム」と呼ばれるようになっていたかれのやり方に反対する社会党（SFIO）や穏健共和派の敵意の結果，また，おそらくマルセイユの風俗に根を下ろした慣行をサビアーニが「組織的に」利用した結果でもあったろう，サビアーニの方法はようやく物議の対象となった。1935 年 5 月，サビアーニは，

6) *Archives départementales des Bouches du Rhône*, série Ⅵ T 9 B 30, cit. par Jean-André Vaucoret, *Un homme politique contesté, Simon Sabiani (biographie)* , thèse de doctorat de 3e cycle, Université de Provence, 1977-1978, p.337; J. -P. Brunet, *ibid*., pp.213-214; Jean-Paul Brunet, Un fascisme français: le parti populaire français de Doriot (1936-1939) , *Revue française de science politique*, vol.33, no.2, avril 1983, pp.264-265.

7) シモン・サビアーニの伝記については，J. -A. Vaucoret, *ibid*., 607p; J. –P. Brunet, *ibid*., pp.213-216; Dominique Venner, *Histoire de la collaboration*, Pygmalion/ Gérard Watelet, Paris, 2000, pp.643-644.

8) D. Wolf, *op. cit*., p.180, 平瀬・吉田訳, p.188.

市役所の支配権を社会党（SFIO）に奪い返され，その職務からはずされた。いずれにせよ，サビアーニひとりが「悪徳政治屋」ではなかったとしても，「サビアニズム」は「悪徳行為と同義語」になっていた[9]。しかしながら，かれの使用した方法にくらべれば，かれの政治的選択――1930 − 1931 年の，負傷した退役軍人の愛国心というナショナリズムへの方向転換――はうそ偽りがなく，それに，かれは，選挙で勝ち取った県会議員，市長，助役などの役職の執行にあたって私財を蓄えるようなことはなかった[10]。

1934 年以来，サビアーニは頻繁にドリオと会い，2 人の政治的見解は多くの点で一致した。仏ソ相互援助条約などの国際問題についての 2 人の下院議員としての発言だけでなく，「サン・ドニ地区多数派」の立場とサビアーニ・グループ（同グループは，理論上は，社会主義行動党とフランス戦線の 2 つの別の組織からなっていた）の立場とのあいだに多くの共通点のあることが分かった。ドリオとはちがって，サビアーニは，1936 年の総選挙で，人民戦線に破れていた（サビアーニは，かれの選挙区で，共産党員が 55 パーセント近い票を獲得したのにたいして，45 パーセントの票しか獲得できなかった）。左翼では選挙の結果に大喜びし，楽隊に先導された行進を組織して，勝利の祝宴を開き，サビアーニを「政治的に葬った」ことを祝った。しかし，サビアーニは，屈伏せず，人民戦線反対派の街頭行進の先頭に立ち，大衆集会を指揮し，人民戦線におびえるブルジョワジーや中産階級の目には，「マルセイユの救済者」と映った。

フランス人民党結成から 1 か月後の 1936 年 7 月 26 日，サビアーニは，1 万 5,000 人の聴衆とマルセイユ市の著名人たちが出席したプラド円形競技場にドリオを迎え，2,000 人から 3,000 人になるとおもわれるかれの組織のメンバーのフランス人民党への加盟と，その他数千人の人びとの同党への共鳴をドリオに伝えた。フランス人民党の政治局メンバー，ジュール・トゥラードとヴィクトル・アリギの短い演説のあと，ドリオのおこなった演説が出席者の熱狂を爆発させた。つぎにサビアーニが「われわれはついに指導者をみいだした・・・今後，われわれは，フランスの魂の刷新のために，危険が迫っている祖国の勝利のために，かれとともにたたかう」と情熱あふれた発言をし，会場を埋めた聴衆を前にしてドリオに話しかけ，つぎのように叫んだ。「われわれは，あなたの戦いの最後まで，あなたについていくでしょう。わたしはあなたに忠誠を誓います。わたしは，今日から指導者と仰ぐ人にたいして，尊敬と規律遵守の気持ちだけを抱くことでしょう。」2 人の男はたがいに抱擁し，ドリオはサビアーニにフランス人民党の新しい最初の県連合のために用意された党旗を引き渡した。一週間後，サビアーニの運動組織は，全員一致で，フランス人民党への加盟を承認し，こうして，サビアーニは，かれが党首であった社会主義行動党のメンバー 3,000 人とともに，フランス人民党に合流し，マルセイユを中心とするブーシュ・デュ・ローヌ県連合は，フランス人民党の主要な砦のひとつとなった（サビアーニは 1938 年に同党政治局にはいり，副党首にもなった）。これ以降，「フランス人民党は 2 つの故郷をもっている。サン・ドニとマルセイユだ」（ポール・マリヨン）といわれることになる[11]。

しかし，共産党も社会党（SFIO）も，ドリオが全国に勢力を広げるのを放置しておかなかった。フランス人民党の集会が予告されるたびに，執拗な逆宣伝がおこなわれ，「ヒトラー主義者」，「ヒトラー親衛隊（SS）」，「ファシスト」を告発するための対抗デモが呼びかけら

9) J. -A. Vaucoret, *op. cit*., p.225.
10) J. -P. Brunet, *op. cit*., pp.214-215.
11) J. -P. Brunet, *ibid*., pp.215-216; D. Wolf, *op. cit*., pp.188-189, 平瀬・吉田訳, pp.180-181.

れ，各市役所や町役場にたいしては，フランス人民党に部屋や公共の場所を提供するのを拒否するよう，激しい圧力がかけられた。

モンペリエでは，1936 年 10 月 25 日午前，同市の競輪場でドリオが演説することになっていたが，集会の 2 日まえになって，市役所は数週間まえにあたえていた使用許可を取り消した。結局，集会はモンペリエから 6 キロメートル離れたモンフェリエの工場で開催されたが，同地方の管区警視正の報告によれば，1,200 人から 1,500 人の参加者しかなく，集会は不成功に終わった。昼頃，ドリオとサビアーニを先頭とする 40 人近くの集会主催者たちのグループが昼食をとりにリュネル・ホテルに車でやってきたが，午後 3 時 30 分頃，そこで事件が発生した。警備のためにホテル周辺に張り込んでいたフランス人民党の 3 人の党員たちが，共産党の活動家たちのグループの襲撃を受けた。かれらはいったん撤退したが，そのときかれらのひとりが共産党員に向けて数発発砲し，たまたま近くにいた女性が腕に負傷した。ドリオとその仲間たちはホテルを出たが，そこで乱闘が起こり，ドリオは投石によって頭部に軽傷を負った。翌日の『ユマニテ』紙は，「憤慨した住民，ヒトラー主義者たちの逃げ込んだホテルを包囲」とのタイトルをつけて事件を報じた。地方警察は，憲兵隊の助けを借りて，なんとか秩序を回復できたが，ホテル近辺に駐車していた何台もの車からピストルや棍棒が押収された[12]。

ニースでは，1936 年 10 月 31 日，祝祭会館でドリオが演説することになっていた。しかし，はじめはフランス人民党支部の発足を後援していた市長のジャン・メドサンは，その後，態度を後退させ，慎重な姿勢をとるようになっていた。共産党は，なんとしてもフランス人民党の集会を阻止しようとしていた。これにたいして，フランス人民党支部は，先の大戦の英雄でアクシヨン・フランセーズを脱退した運送業者ジョゼフ・ダルナンの指揮下，すばやくものものしい警備陣を組織した。この警備のおかげで，すくなくとも会館内部では，集会はまったく平穏に進行した。フランス人民党カンヌ支部書記マルセル・フィリップ——俳優ジェラール・フィリップの父である——，ついでジュール・トゥラードの発言のあと，ドリオが演説した。6 月 28 日サン・ドニでのフランス人民党結成大会でおこなった演説よりもはるかに手厳しく，共産主義と人民戦線を批判したかれの長い演説は，数千人——ニースでのフランス人民党の主要幹部になっていたヴィクトル・バルテレミーの回想録によれば 8,000 人——の出席者を熱狂させた。

ヴィクトル・バルテレミーによれば，反対に，会場の外では，激しい衝突が繰り返し起こった。「数千人の共産党員のデモ隊が祝祭会館に通じるすべての道路を占拠し，あらたな聴衆が会場に近づくのを妨害した。地方警察は，機動憲兵隊の増援によって補強されていたにもかかわらず，道をあけようとする努力をまったくしなかったので，会場にはいろうとする聴衆は，共産党員のバリケードをひじやこぶしや足で押し分けて道を切り開かねばならなかった。そのため，数百人のけが人が出た。公式の推計では，負傷者は 300 人と数えられ，そのうちの 2 人はそのとき受けた傷が原因で死亡したが，かれらはフランス人民党のメンバーではなかった。8,000 人の人びとが祝祭会館にやっとはいり込むことができた」とかれは書いている[13]。

数日後，フランス人民党の活動家たちは，かれらの勢力があきらかに劣勢であったにもかかわらず，共産党の主要幹部ヴァイアン・クーチュリエによって 11 月 9 日に同じ祝祭会館で

[12] *Archives Nationales,* F^7 14817, dossier PPF, 機動警察隊の地方管区主任警視正からパリの刑事警察局総監に宛てた報告（1936 年 10 月 26 日）。

[13] Victor Barthélemy, *Du communisme au fascisme. L'histoire d'un engagement politique*, Albin Michel, Paris, 1978, p.109.

開かれることになっていた集会の機会に，相手と同じ方法で仕返ししようと決意した。バルテレミーによれば，「フランス人民党の警備メンバーはいくつかの小さな戦闘グループに組織され，共産党員たちが，集会後，成功を祝うためにいくつもりであった界隈にかれらの集団が集まろうとするのを妨害した。それは深刻な乱闘を引き起こす結果となったが，今度は，われわれの側よりもはるかに多数のけが人を病院に送る破目になったのは，共産党であった[14]。」

全国的に勢力を拡大しようとするフランス人民党の努力は，部分的には成功した。1936年夏から秋の初めにかけて，ドリオは，バルベ，マリヨン，トゥラードその他の雄弁家たちのチームとともに，フランス各地でかなりの数の集会を開いた。マルセイユ，ニース，トゥーロンなどフランス人民党がすでに頭角をあらわすようになっていた東南部フランスにくわえて，ドリオは，ダックス（フランス南西部，ランド県）の集会で，上院議員で市長のミリエス・ラクロワのかたわらで演説し，ボルドーでは数千人（『国民解放』紙によれば1万2,000人）の聴衆を集め，さらに，マリヨンとともにアルジェリアで遊説旅行をおこない，その結果，アルジェリアでは6,000人の新しい入党が記録された。これに反して，リヨン，クレルモン・フェラン，ベルック（パ・ド・カレー県）などの都市では，フランス人民党の集会が県当局によって禁止されたため，同党は非公式集会しか組織できなかった[15]。

1936年10月前半には，フランス人民党はパリの大きな会場で6度，集会の開催に成功し，そのうちのひとつはベルヴィル（パリ20区）の労働者街で開かれた。このときの集会について，ドリュ・ラ・ロシェルは，叙情的で比喩に富んだ文体で，つぎのように書いている。「ドリオの飛行機，サン・ドニで生まれたばかりの機械が離陸しはじめたのは疑いない。先夜のベルヴィルで，わたしは全神経でそう感じた。がくんがくんとしたエンジンの動きはしだいに長くなり，それは地面から起き上がりはじめた。飛び立とうとしていたのは，パリとフランスの民衆の精神である[16]。」

1936年11月9日には，サン・ドニ市立劇場でフランス人民党第1回全国大会が開かれ，大会は3日間続き，740人ばかり（アンケートに記入した人数）の代議員，1,000人近い招待者やシンパ，多数のジャーナリストが集まった。ドリオは，最初の日に，6時間に及ぶ長い演説をおこない，4つの主要テーマについて議論を展開した。

Ⅰ.「フランス人民党は共産主義への道を阻止する。」共産党が，労働者の騒擾をあおりたてる政策によって，「1936年6月の衝撃を繰り返そう」と望んでいるとドリオは考え，共産党の武器庫がいくつも警察によって発見されたが，同党は全国いたるところに武器庫をつくろうとしているといい，共産党員を緊急動員しようとする計画が全国的にみられることを機密文書にもとづいてあきらかにし，共産党の武装解除と解散をつよく求めた。そして，人民戦線のなかで共産党を孤立させようとして，左翼諸党が共産党との関係を断つよう要求した。

Ⅱ．外交政策。ドリオは，まず，先の大戦後，フランスの指導的政治家たちによって3つの重要な誤りが犯されたことを指摘した。1）ヴェルサイユ条約。「われわれは，戦争による破壊のすべてを敗戦国に支払わせるのは不可能であることを理解せず，敗戦国の反抗を招くにいたった・・・ムッソリーニの生みの親，ヒトラーの生みの親，そして，今日，世界に存在し

[14] V. Barthélemy, *ibid*., p.110.

[15] V. Barthélemy, *ibid*., p.114; Jacques Doriot, *La France avec nous* !, Flammarion, Paris, 1937, p.6.

[16] Pierre Drieu La Rochelle, *Avec Doriot*, Gallimard, Paris, 1937, p.63.1936-1937年に『国民解放』紙にドリュ・ラ・ロシェルが発表した論説を再録したもの。

ているすべての独裁者たちの生みの親は，われわれである。」2）対独政策。フランスは，ヨーロッパの大幅な軍備縮小に努力するために，ドイツの武装解除を有効に利用しなかった。3）国際連盟。国際連盟は，ヨーロッパの経済的再編成のために重要な役割を果たそうとはせず，もっぱら「集団安全保障を法的に定義する」ために努力しているにすぎない。

ついでドリオは，あらためて仏ソ相互援助条約にたいする攻撃を繰り返した。1935 年 5 月 2 日，ラヴァル内閣の外相ルイ・バルトゥーがソ連と相互援助条約を締結するという悲劇的な誤りを犯して以来，われわれが「西ヨーロッパにおけるボルシェヴィキの手先」となった結果，フランスとの同盟の破棄を通告したベルギーのような，多くの国ぐにをわれわれから遠ざけてしまったとドリオはのべ，ソ連は西ヨーロッパで戦争が起こることを望んでいて，フランスとイギリスとがイタリアのエチオピア併合（1936 年 5 月 9 日）にたいする制裁問題で譲歩しようとしているのに，ソ連はイタリアを国際連盟から追放してドイツの腕のなかに押しやるために決定的な役割を演じ，また同様に，スペイン内戦にさいしても，フランス共産党を介して，共和派支援のために介入するようフランスをせきたてていると主張した。

とりわけ，ドリオがあらゆる立場のフランスの政治家たち，なかでも左翼諸政党の指導者たちがとらわれている誤った粗雑なソ連観を批判したとき，その辛辣な言葉は的をえていた。たとえば，1936 年 10 月のビアリッツの急進党大会で，エドゥアール・エリオがロシアは民主的で平和な国になりつつあると主張し，同国ともっと親密に協調するよう勧告したのにたいして，ドリオは「急進党大会は目を覚まして，反対者を銃殺せざるをえないような国は民主的な国ではないとエリオ氏に反論すべきだ」と叫んだのであった。

このような状況下でなにをなすべきかとドリオは問い，まず，スペインにたいしては完全な中立政策をとるべきだと主張し，「戦闘員の一部を半ば非公式に補給するなどは，もうやめたまえ」といって，国際旅団へのフランス人義勇兵の派遣に反対するキャンペーンをおこない[17]，フランコに，もしかれが全スペインを占領したならば，かれの政府は承認されることをそれとなく示すべきだと主張した。しかし，この一方では，スペイン内戦へのドイツとイタリアのきわめて大規模な軍事介入については，ドリオは完全に口を閉ざした。さらに，イタリアとは，イデオロギー的議論の介入なしに，あらゆる可能性をつくして交渉をするべきだとドリオは続け，「わが国の政策が権威主義諸国にはとげとげしい針のように突き刺さり，その結果，わが国の真の国益がなおざりにされてしまっているのは，フランス国民が国益よりは政治体制の形式的違いにこだわりすぎているからだ」，「どうして，イタリアの独裁者と議論できないのか。わが国は，つい最近，ソ連の独裁者と条約を締結したばかりではないか」とのべた。エチオピア問題にかんしては，ドリオは，同国の植民地化はイタリアの人口圧力と経済的困難を軽減するだけでなく，半世紀まえなら，イタリアがエチオピアを征服してもかまわないかなどは問題にもならなかったであろうし，それに，事実，イギリスとフランスはエチオピアにかんするイタリアのフリー・ハンドを暗黙裡に認めているではないか，と主張した。

このようなドリオの主張は「レアル・ポリティーク（現実的政治）」の哲学そのものであり，そこには，もはや，反植民地闘争を果敢に指導したかつての共産主義の闘士の姿はなかった。ドリオによれば，ドイツにたいするフランスの態度を決定すべきは，イデオロギー的，道義的干渉を排除したこの同じレアル・ポリ

---

17) Rémi Skoutelsky, *L'Espoir guidait leur pas. Les volontaires français dans les Brigades internationales, 1936-1939*, Grasset, Paris, 1998, p.282sq.

ティークの論理であった。ヒトラーが，政権を掌握して以来，再軍備問題についてフランスとの会談を提案してきているのに，フランス政府は，ヒトラーが平気で嘘をつくということを口実にして，何度も，かれの申し入れを拒否してきているが，しかし，イギリスはドイツとのあいだでドイツ海軍が保有する船舶の総トン数を制限する軍縮協定を調印（1935年6月18日の英独海軍条約。これによって，ドイツはイギリスと同数の潜水艦の保有を認められたが，海軍の総トン数はイギリス海軍のそれの35パーセントに制限された）したではないか，とドリオは強調した。

ドリオは，かれ自身もヒトラーにたいして不安を抱いていることを隠さなかったが，しかし，「わたしはいまわたしの感じている困惑を白状するならば，ヒトラーとの直接会談がいったいどういう結果になるか，わたしには分からない。実際，どういう結果になるか分からない。ドイツの指導的政治家たちが誠実であるかどうかも分からない。しかし，わたしが断固抗議し，今後も抗議しつづけることがひとつある。それは，ヒトラーの政権掌握以来，フランス政府がドイツとの交渉をまったく開始しようとはしなかったことである」と主張した。このように，ドリオは，ドイツとの交渉を始めなければならないと主張したが，しかし，幻想を抱かず，毅然として交渉しなければならないといい，『国民解放』紙の多くの論説のなかであきらかにしてきたかれの立場を，あらためてつぎのような言葉で繰り返した。「ここで，わたしは，穏やかな口調で，われわれにたいするヒトラーのいっさいの“愛の言葉”にだまされはしない，とドイツにいいたい。わたしは，ドイツにたいしては，きわめて慎重である。たしかに，ドイツと議論することを望んではいるが，われわれがお人好しであることは望んでいない。わたしは，われわれがお人好しで，だまされることは望んでいないので，ヒトラー氏にわが国の領土に手を出してはいけないと分からせるような，ドイツの軍隊に対応する安全保障の条件をフランスにつくりあげるつもりである。」

第2次世界大戦にいたるその後の歴史の展開をみれば，ドリオがつよく勧告したヒトラーとの会談は，たとえそれが軍備制限協約と仏独不可侵協定の締結[18]をもたらしたとはいえ，結局，それが幻想にしかすぎなかったといわざるをえない。しかし，ドリオのとった立場は，平和の維持に夢中になり，しかし，その平和主義は国の独立と国力への意志と切り離せないことを知った元兵士の現実主義的論理にもとづくものであったといえよう。このとき，ドリオは本当に，かれの言葉通り，ヒトラーの誠実さを疑いながらも，ドイツとの平和的交渉の必要を信じていたのであろうか。十中八九，このとき，ドリオがドイツに買収されていたというような事実はなく，おそらく，かれは本心からドイツとの平和的交渉を願っていたのであろう。この場合，1941 − 1945年のヴィシー政権下，狂おしいまでの対独協力に走ったドリオの姿を1936 − 1939年のかれの姿に張りつけることは，慎まなければならない。時代錯誤は歴史家の陥りやすい陥穽であり，それはひとりの人間にたいして不当な仕打ちをすることになるばかりか，とりわけ歴史の無理解にいたりつくことになろう。共産党に天賦の予知能力があったわけではなく，ドリオのその後の運命が1936年に，ましてやそれ以前に決定づけられたわけでもなかったにもかかわらず，共産党は，1936年春以降，ドリオを「ヒトラー主義者」，「ヒトラー親衛隊（SS）」と倦まずたゆまず非難しつづけたのである[19]。

Ⅲ．経済政策。ドリオは，当時進められつつあった人民戦線内閣の新しい経済政策（賃金引上げ，有給休暇，労働時間の短縮）にたいしては，生計費の上昇がすでに「賃金の引上げ分を

[18] 竹岡前掲書, pp.528-529, 573注5).
[19] J. -P. Brunet, *op. cit.*, p.222.

吸収しはじめている」ことを示しているように，「社会的優遇措置の獲得は，現在の国の経済能力に応じて制限されるべきである」と批判した。また，人民戦線内閣が，政権掌握後 4 か月近く経たのち，1936 年 10 月 1 日にようやく実施に踏み切ることになるフランの平価切下げについては，それは貯蓄者，とりわけ中小の貯蓄者からなけなしの資産を詐取するものであると主張した。フランの金価値の保持に固執して平価切下げに反対する声は，当時，極右から極左までほとんどフランスの世論となっていたが，とりわけ共産党は，平価切下げが労働者の利益に反し，貧しい人びとを犠牲にする偽善的方法であるとして，その実施に反対していた[20]。平価切下げにかんするドリオの見解は，このように，共産党の主張と変わらず，当時のフランスの世論を越えるものではなかった。

経済政策の批判以上に興味深いのは，技術進歩と資本主義の役割についてのドリオの考えであろう。「今世紀には，人類の欲求のごく取るに足りない一部分だけがみたされたにすぎない。自動車，飛行機，ラジオは，明日には，人間の新しい欲求を発達させる新しい技術的発見によって追い越されてしまうおもちゃにすぎない。われわれが，資本主義の前進的役割を十分かつ有効にはたらかせ，科学と人間の欲求の未知の分野において資本主義を無限に発展させようとするのは，そのためである。資本主義は，これらの未開発の分野において，すべての利潤を使用して，すべてのリスクをかけて，そしてまた，われわれがつくりあげようと望んでいるナショナリスト国家のすべての助成によって，チャンスを追求することが可能であり，また追求しなければならない」とドリオはいい，そのようにして，企業はリスクを冒して利潤をあげるべきであり，国家に保護された企業の超過利潤は，労働者階級を経済進歩に参加させ，技術進歩と社会進歩を合致させることを可能にする社会基金に払い込まれるべきである，と主張したのであった。

Ⅳ．国内政策。ドリオの演説の最後の部分は，時事問題のほか，フランス人民党の教義，組織，宣伝活動など多数の問題を論じていたが，ここではドリオが展開したとりわけ基本的な 2 つの考え方を紹介するにとどめたい。

1）フランスが「人びとの士気を喪失させる物質主義」の時代から脱することを可能にし，フランス国民すべてに国益が個人の利益に優先することを自覚させ――「フランスを第 1 に，フランス国民各自はそのあとで！」とドリオは叫んだ――国の指導者たちに可能なことと可能でないことをはっきりいう勇気をあたえる国家的規律の制定の必要。

2）制度改革の問題。「わが国をその歴史的運命の高みにまで」引き上げなければならないとドリオは主張した。しかし，これにつづけて，かれは，そのために「現行の諸制度を変えるべきか否か，わたしは知らないが，それはとくに現行の諸制度自体に依存しているとだけ答えておこう・・・これについて答える義務があるのは，民主制，議会，この国の諸政党，すべての制度，共和国大統領から治安判事にいたるまでの，この国の機関のすべての公務員であって，われわれではない。かれらが答えないならば，国民はかれらの頭上を越えていくであろうし，その行動はかれらの犠牲において実行されるであろう」とのべている。このような言葉によって，ドリオはいわば潜在的な脅しをかけてはいるが，しかし，いかに制度改革をするかについては，はっきりと答えてはいない。このように，ドリオがこのときラディカルな制度改革の主張を明確にはせず，保守的ともいえる姿勢をとったのは，おそらく，かれがまだフランス人民党をフランス・ファシズムの一形態に向かわせようと決心してはいなかったからではなか

[20] 竹岡前掲書, pp. 54, 167-168, 185, 199, 200.

ろうか[21]。

フランス人民党第１回全国大会に出席していたベルトラン・ド・ジュヴネルは，このときのドリオの演説にはファシズムをおもわせるものはなにもなかったといい，ムッソリーニやヒトラーの，せいぜい聴衆の想像力を引きつけるだけで，畢竟，「破滅した国民のための幻想的な夢物語」にすぎないたわ言にも等しい演説とはちがって，ドリオの「建設的で長い説明は，協力を呼びかける人びとにたいする敬意，それらの人びととの知的調和の意志をはっきりと示していて，それこそ，わたしの信じるところでは，民主主義の魂にほかならない」と主張している[22]。

また，ドリュ・ラ・ロシェルは，フランス人民党結成大会のときと同様，ふたたびかれ独特の才能あふれるリリシズムで，この日，２度に分けてであったが，６時間も続いたドリオの演説の間中，ずっと，「われわれはドリオが生き，はたらくのをみた。鍛冶屋の息子で元冶金工がその肩と腰をうねらせ，そのふさふさした髪を逆立て，その広い額を汗まみれにして，われわれの目の前で，15 年間の労働を引き継ぎ，花咲かせるのをみた。われわれの前で，かれは懸命にフランスの全運命を引き寄せ，ヘラクレスの兄のように，腕をいっぱいに伸ばしてそれを持ち上げた」と表現している。さらに，フランス人民党の綱領について，ドリュ・ラ・ロシェルは，「われわれは，ドリオが，かれの溶鉄炉から，まだ赤く燃えている鉄片のような条項をひとつづつ引き出すのをみた。マリヨン，ルーストー，アリギが，われわれの目の前で，それらの主要な部品を組み立てた」と書いている[23]。

ドリオの演説は聴衆を熱狂させ，何度も熱烈な拍手を浴びた。11 月９－11 日の３日にわたった全国大会では，ドリオの演説のあと，アンリ・バルベが党組織を，ヴィクトル・アリギが植民地問題を，アレクサンドル・アブランスキーが労働問題を，ロベール・ルーストーが経済・社会理論を，ポール・マリヨンがフランス国民の将来の運命を論じた。

ついで，大会は６月の結成大会で暫定的に指名された政治局メンバーの更新（継続）を認め，中央委員会メンバーの「選挙」――実際には「党委員長」によって提出されたリストの承認――をおこなった。アンリ・バルベ（党書記長），マルセル・マルシャル（経理係），ポール・マリヨン（宣伝責任者），ジュール・トゥラード（党地方組織担当），ヴィクトル・アリギ（アルジェリア担当），アレクサンドル・アブランスキー（労働組合問題担当），イヴ・パランゴー（党組織担当）の７人が政治局におけるドリオの協力者となった。火の十字架団の下部組織，国民義勇軍のメンバーで，ピュシューその他の極右出身者の代弁をつとめたパランゴー以外は，共産党系の統一労働総同盟（CGTU）とアムステルダム＝プレイエル運動とでの職務行使をつうじて，共産党と結びついていたアブランスキーを含めれば，すべて元共産党員ないし共産主義者であった。ドリオ以外の６人の元共産党員のほとんどは，長年サン・ドニでドリオの同僚であり，ドリオ同様，フランス人民党の結党に参加するすくなくとも２年まえに，フランス共産党との関係を絶った人物たちであった[24]。

アンリ・バルベはかつてドリオの後を継いで共産党青年部書記長をつとめ，1933 年には，兵役拒否の罪で８か月間を刑務所で過した。

---

21) J. -P. Brunet, *op. cit*., pp.218-224.

22) Bertrand de Jouvenel, *Un voyageur dans le siècle, 1903-1945*, Robert Laffont, Paris, 1979, p.299.

23) P. Drieu La Rochelle, *op. cit*., pp.80, 82,《Le 1er Congrès du parti-Le second rendez-vous de Saint-Denis》.

24) フランス人民党指導部の構成とその変化については，D. Wolf, *op. cit.,* pp.186-190，平瀬・吉田訳, pp.193-198; J. -P. Brunet, *op. cit.,* pp.224-225; R. Soucy, *op. cit.,* pp.230-237, (traduction française) *op. cit*., pp.326-334.

1934 年，ドリオとトレーズとの党内抗争ではドリオに味方して，共産党を追われ，1936 年，ドリオがサン・ドニ市長に再選されたとき，同市の助役になった。ヴィクトル・アリギも元共産党員で，共産党の銀行，労農銀行の支配人であったが，1930 年に共産党を去って急進党に入党，1936 年，フランス人民党に加わるために急進党を離党した。ポール・マリヨンは 1922 年，23 歳のとき，フランス共産党に入党し，『ユマニテ』紙の編集者となり，1926 年に同党中央委員に選出された。1927 年，モスクワに赴いて，コミンテルン宣伝部で働き，1928 年 7 月には，コミンテルン第 6 回大会に出席した。1929 年，ソ連から帰国後，共産党を離党し，その後，ドリオと合流するまで，社会党（SFIO），ついで社会主義共和派連合に属していた。マリヨンは，ガブリエル・ル・ロワ・ラデュリーにドリオを推薦したジャーナリスト，クロード・ポプランの友人であり，ルロワ・ラデュリーをドリオに直接紹介したのは，かれであった。

政治局の下には中央委員会があり，主として党地方支部のリーダー，ジャーナリスト，知識人たちで構成されていたが，政治局ほど頻繁には会合を開かず，政治局ほど党の重要決定にたいして発言力はなかった。約 100 人で構成されたその最初のメンバーのなかには，パリ支部連合の幹部たち（パリ市についてはマチュラン・ボレロ，ベルトラン・ド・モーデュイ，パリ北郊についてはマルセル・パラ，サン・ドニについてはイヴ・マロ），地方支部連合の幹部たち（マルセイユについてはシモン・サビアーニ，ニースについてはヴィクトル・バルテレミー，リヨンについてはアルベール・ブーグラ，ボルドーについてはジャン・ル・カン，アルジェについてはジャン・フォサーティ）が，また，ピエール・ドリュ・ラ・ロシェル，ベルトラン・ド・ジュヴネル，クロード・ジャンテ，カミーユ・フェジー，モーリス・ルブランなど，『国民解放』紙の寄稿者である多数の著作家やジャーナリストが，そして，警備（アドリアン・ファラス），規律問題（ピエール・デュティユール），経済・社会問題（ロベール・ルーストー）など特定分野の担当者たちがいた。こうして，中央委員会の重要な仕事は，左翼――基本的には共産党――から来た人物と右翼から来た人物（ポプラン，ルーストー，ド・モーデュイ，パランゴー，ジャンテら）とによって分かち合われたのであった。

しかし，その後，フランス人民党の政治局メンバーの構成は大きな変化を経験する。すなわち，1937 年から 1938 年にかけて，政治局はそのメンバーを拡大し，10 人を越す極右出身者を含むようになった。そのもっとも重要な人物はピエール・ピュシューであり，運動資金の主要供給源として，かれは政治局の討議で大きな影響力を行使した。1937 年 5 月には，クロード・ポプラン，ロベール・ルーストーとともに，ボルドーの建築業界の富豪ジャン・ル・カンが政治局に加わった。ルーストーはカトリックの鉱山技師で，ピュシューの親友であり，フランス人民党に参加するまえ，2 人はともに火の十字架団の下部組織，国民義勇軍の指導的人物であった[25]。さらに 1938 年 3 月にはピエール・ピュシュー，同年夏にはピエール・ドリュ・ラ・ロシェル，ベルトラン・ド・ジューヴネル，ラモン・フェルナンデス，クロード・ジャンテ，エミール・マッソン，モーリス・トゥーズ，シモン・サビアーニら，多数の確信的な反共産主義者が政治局に加わった。

こうして，1938 年には，フランス人民党政治局はもはや元共産党員によって支配されてはいず，そのメンバーの相当数は極右の前歴の持主であった。パランゴー，ピュシュー，ポプラン，ルーストーは火の十字架団の元メンバーで

[25] Pierre Pucheu, *Ma vie*, Aimot-Dumont, Paris, 1948, p.72.

あり，クロード・ジャンテはかつてアクシヨン・フランセーズ学生部のリーダーで，『カンディード』，『ジュ・シュイ・パルトゥー』，『プティ・ジュルナル』のような右翼の諸新聞に執筆していた。1938年に政治局メンバーになった著名な3人の知識人，政治学者のベルトラン・ド・ジュヴネル，小説家のピエール・ドリュ・ラ・ロシェル，ラモン・フェルナンデスは，いずれも政治ジャーナリストでもあり，その社会経済的見解において熱烈な反マルクス主義者であった。また，1937年には中央委員会も政治局と同様に拡大されて，3人の元共産党員のほか，極右出身者にも席があたえられ，愛国青年同盟の元メンバー，ジャック・マルタン・サネ，フランシスムの元メンバー，ジャン・マリー・エモーがあらたに加わった。

1936年11月9－11日に開催されたフランス人民党第1回全国大会は，要するに，党の組織を決めるための大会であった。ドリオの演説には，ファシズムをおもわせるものはなかった。しかし，それにもかかわらず，見逃すことができないのは，大会によって採用された儀式，党旗，右手を半ば差し伸ばす敬礼（ローマ式敬礼のヴァリアント），新しい党歌，とりわけ「フランス人民党，その理想，その党首への」忠誠の宣誓である。のちにみるように，それらは，すべて，すでにフランス・ファシズムの誕生を告げる明白な兆候であったのではないだろうか[26]。

2. フランス人民党の組織

フランス人民党結成後，ジャック・ドリオは，フランス各地で集会を重ね，宣伝活動を展開した。しかし，多くの公開集会がトラブルを恐れた県ないし市当局によって禁止されたので，フランス人民党はしばしば公開集会を私的集会に変更しなければならず，その結果，少数の出席者しか集めることができなかった。しかも，私的集会の場合でも，会場の出口では激しい対抗デモが待ち構えていた。

一例をあげれば，1936年12月16日晩，クレルモン・フェランの私的集会でおこなわれたドリオの演説は，100人から150人ばかりの聴衆しか集めることができなかったが，午後11時30分頃，会場を出ようとした集会参加者と同地方の人民戦線組織が召集した対抗デモ隊とのあいだで，乱闘が起こった。そのため，会場付近に待機していた機動憲兵隊の介入をまねき，その結果，5，6人の憲兵が負傷し，10人を越える警官が打撲傷を負い，商店のショーウィンドーのガラスが割られた。対抗デモ隊側に多数の軽傷者が出たため，集会参加者側は，禁止武器（棍棒，ピストル）を携帯していたとして，5人が逮捕された[27]。ドリオ自身も，1936－1939年のあいだ，何度もテロ行為に遭った。1937年には，メジエール（アルデンヌ県）でおこなった集会のあと，ドリオの乗った車が「共産党員たちによる」機銃掃射を浴びた（犯人が共産党員だった可能性は高かったが，しかし，その証拠はなかった）。この事件後，フランス人民党が大量に配布した写真では，後部座席左側の窓ガラスに2発の弾痕の残っているのが認められた[28]。そのため，これ以後，ドリオは，ボディーガードのチームによって護衛され，移動のときには，地方活動家たちがそのチームを補強した。その後も，フランス人民党は，同党がまだ根を下ろしていない地域でも，困難を冒して，集会を開催しつづけ

[26] J. -P. Brunet, *op. cit.*, pp.224-225.

[27] *Archives Nationales,* F^{7} 14817, dossier PPF, Communication téléphonique reçue du commissaire de police mobile de Clermont-Ferrand par la Direction générale de la Sûreté nationale, 17 décembre 1936.

[28] Cahiers de *L'Emancipation nationale*, décembre 1941, 別刷り写真, *Archives de la préfecture de police de Paris,* B/a 340.

た。

しかし，人民戦線の結束に亀裂が生じ[29]，第1次レオン・ブルム内閣が総辞職した1937年夏以降，とりわけ1938年4月10日，急進党の強固な反人民戦線派の政治家たちが入閣しただけでなく，内閣の構成を穏健右翼にまで拡大した第3次ダラディエ内閣が成立し，人民戦線の結束が完全に崩壊したとき以降[30]，共産党の影響力はいちじるしく減少し，フランス人民党の活動が遭遇する困難ははるかに小さくなった。ヴィクトル・バルテレミーによれば，1938年6月12日に開かれたフランス人民党全国評議会では，同年5月中に2,000回近い集会が開催されたことが報告されたという。また，ドリオは，6月下旬の週末には，トゥーロン，マルセイユ，リヨン，モンレリー（セーヌ・エ・オワーズ県）の自動車サーキットでつぎつぎと演説をおこない，飛行機を使って，この遊説をこなしたという[31]。

このような活動の結果，――おそらく1938年初めに絶頂期に達したろうとおもわれる――フランス人民党の党勢は，いったい，どれほど拡大できたのであろうか。

フランス人民党機関紙『国民解放』は，党員数について，とてつもない数字をあげている。同紙によれば，党員数は，1936年7月半ばの2万5,000人から，7月末には4万2,000人，9月末には8万2,297人，10月末には10万1,255人に，その1か月後，第1回大会のあとでは12万人に，ついで1937年4月には18万人，1937年12月には28万人，1938年1月半ばには29万5,000人に増加している[32]。

これらの数字を信用すれば，フランス人民党結党時に示された高揚感は，1938年3月11－13日に開催される第2回全国大会前夜まで維持されたことになろう。そのあと，『国民解放』紙は，党員数が25万人から30万人までのあいだを上下したことをほのめかしているが，1938年秋以後は，党員数の動きにかんしては完全な沈黙を守っている。これらの公式発表の数字は，過度に水増しされているとみてまちがいないであろう。水増しの原因は，第1に，地方幹部たちの大部分が，自分を売り込むために，人為的に増大させた党員数を本部に届け出たことにあったろう。また，党の下部組織では，一度，名前がファイルに記載されると，その人物に翌年以降の活動実績がなくとも，あるいは，たんに寄付をしたり，集会に出席したり，党発行の書籍や定期刊行物を買ったりしただけであっても，党員とみなす傾向があったろう。さらに，地方幹部だけでなく，おそらく党本部もまた，党勢を誇るために，党員数を嵩上げしたことであろう。

1938年秋にフランス人民党指導部を襲った深刻な危機については後述するが，このとき政治局でドリオの補佐役のひとりであったヴィクトル・アリギがドリオに宛てて送った手紙[33]のなかで，かれが政治局メンバーを辞任する理由のひとつは，党の組織と運営の欠陥にあることをあきらかにしたあとで，「君（フランス人民

29) 第1次レオン・ブルム内閣が，人民戦線の経済政策によって悪化した「財政の立て直しのために必要な」，財政全権の譲渡を要求したのにたいして，上院では，共産党は棄権を決定したが，急進党議員たちはこれに反対し，結局，政府の要求が上院によって拒否された結果，1937年6月22日に，ブルム内閣は，1年間の政権執行ののち，総辞職した。こうして，強固に結合した与党に支持された政府によって広範な経済・社会改革をめざす政策が実現されるという期待が消えたとき，人民戦線は事実上崩壊した。竹岡前掲書, p.267 sq.

30) 竹岡前掲書, p.327 sq.

31) V. Barthélemy, *op. cit.*, p.136.

32) *L'Emancipation nationale*, 15 juillet, 30 juillet, 30 septembre, 30 octobre, 28 novembre 1936, 10 avril 1937 et 14 janvier 1938; D. wolf, *op. cit.*, p.217, 平瀬・吉田訳, p.223; Paul Guitard, *La France retrouvée*, Les Œuvres françaises, Paris, 1937, p.247.

33) 1938年秋から1939年初めにかけて，幹部の大量離党をもたらしたフランス人民党の危機のとき，ドリオの辞職した副官たち数人がドリオに送った手紙がパリ警視庁文書館に保管されている。*Archives de la préfecture de police de Paris,* B/a 341, dossier 8310-1 et B/a 337, dossier 2.

党では，党員間で君僕で呼び合う習慣が採用されていた）はかたくなに真実を隠してきた。党結成後30か月経っても，党の創立メンバーは正確な党員数，党機関紙の本当の発行部数，党財政の正確な状態を知らなかった。僕は，もっぱら推論とさまざまな情報を突き合わせた検証とによって，党員数を4万5,000人から5万人，『自由』紙（1937年5月，フランス人民党が買収したパリの夕刊紙）の発行部数を10万部と見積もっている」とつけくわえている[34]。ただし，このアリギの手紙は，1939年1月に，すなわち，フランス人民党が戦前もっとも苦境にあった時期に書かれたものであったことを考慮しなければならないであろうが。

ディーター・ヴォルフは，フランス人民党の経理係によって提供された数字にもとづき，「党員として登録され，党活動に積極的に参加したメンバーは，5万人から6万人を越えることはなかった」といい，そのなかには真の活動家たちの強固な中核，すなわち，ドリオとその党に一身を捧げた党員たちが存在したが，その数はおそらく1万から1万5,000人であったろうと推測している[35]。フィリップ・ビュランも，1936年夏のあいだの入党数の急速な増加は，その後，減速し，フランス人民党の党員数が最大数に達したのは，1937年中頃であったようであり，1938年の30万人という『国民解放』紙が発表した数字はまったく信用できないとしている[36]。

また，1937年5月に政治局にはいり，フランス人民党の宣伝責任者となっていたジャーナリストのクロード・ポプランは，その回想録のなかで，1937年には活動的メンバーは6万人，シンパは30万人であったと推定している[37]。『国民解放』紙の講読申し込み数から判断すれば，これとほぼ同等な数字がえられる。すなわち，フランス人民党の党則によれば，各党員は週刊の機関紙『国民解放』を予約購読しなければならなかったが，同紙によって公表された最大の予約数は1937年中頃の7万5,000人であり，1936年12月には，すでに7万という水準に達していた[38]。

これらにたいして，ジャン・ポール・ブリュネは，フランス人民党の党員数は，その絶頂期には，おそらく10万人をかなり越えていたであろうと考えている[39]。10万人というのは，とくに結成後2年足らずの政党の党員数としては，きわめて高い数字である。しかし，それは，フランス人民党結成とほとんど同じ時期，人民戦線政府によって解散させられた火の十字架団の後継組織として，フランソワ・ド・ラ・ロックが結成したフランス社会党（PSF）の党員数よりは，はるかにすくなかったのである。

フランス社会党（PSF）は，結党後半年足ら

---

34) 『自由』紙については，ディーター・ヴォルフも，「フランス人民党の指導者の指揮の下でも，この新聞はもはや新規の読者を獲得することはできなかった。フランス人民党は，その発行部数を20万部と発表したが，実際には，せいぜい10万部が印刷されていたにすぎない。1938年以降には，読者数は目にみえて減少し，1939年にはかろうじて3万部が発行されていたにすぎない。同年5月には，『自由』紙は発行中止になった」と書いている。 D. Wolf, *op. cit*., p.198, 平瀬・吉田訳, p.206.

35) D. Wolf, *ibid*., p.223, 平瀬・吉田訳, p.229. しかしながら，「党員として登録され党活動に積極的に参加したメンバー」というのは，「党員」の正確な定義ではないことに注意。

36) Philippe Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery, 1933-1945*, Editions du Seuil, Paris, 1986, pp.285-286.

37) Claude Popelin, *Arènes politiques*, Arthème Fayard, Paris, 1974, p.116.

38) *L'Emancipation*, 26 décembre 1936; *La Liberté*, 25 juin 1937. 初期の入党者たちのほとんどは，かれらがはいった新しい党を支援したいとの気持ちから，機関紙の定期購読を申し込んだであろうから，予約購読者の数はポプランの数字に近いものになろう。シンパの数にかんしていえば，『国民解放』紙とドリオが1937年5月に買収した夕刊紙『自由』とを合わせた発行部数は，ほぼポプランの数字を裏づけている。すなわち，フランス人民党の絶頂期，『国民解放』紙はおよそ13万部から15万部を印刷し，『自由』紙は10万部を印刷していた（売れ残り部数は不明）。C. Popelin, *ibid*., p.115; D. Wolf, *op. cit*., p.198, 平瀬・吉田訳, p.206.

39) J. -P. Brunet, *op. cit*., p.229.

ずして，その党員数は60万人になり，同時期の共産党（28万4,000人）と社会党（SFIO）（20万2,000人）の両党を合わせた党員数を凌駕した。その後も党勢は急速に拡大し，党員数は1937年には70万人を大きく越え，1938年にはおそらく80万人（公称では200万人），1939年にはおよそ100万人（公称では300万人）に達し，フランス右翼最大の政党になった[40]。フランス社会党（PSF）には左翼に敵対的な中産階級の多数のフランス人が入党し，かれらは伝統的な右翼政党には期待できない同党の組織的な――しかし，ド・ラ・ロックによって合法の限界を越えないと決められた――行動を支持したのであった[41]。

これにたいして，フランス人民党は少数の地域にしか根を下ろさず，その党員の地理的分布は，左翼と極右から構成された同党の運動の二面性をよく示していたということができる。もっとも党員数が多かったのは，パリ地域であった。パリ郊外（セーヌ・エ・オワーズ県とセーヌ・エ・マルヌ県）では，パリ北郊地区の党員数が群を抜いて多かったが，そのうちの6割をサン・ドニ市民が占めた。このように，フランス人民党はパリ地域，主としてパリ北郊とその近隣の労働者の町からなる「赤い地帯」と呼ばれた地域にもっとも深く根を下ろし，フランス共産党はドリオの離党によって奪い取られた同党の砦をすぐには奪還できなかった。

パリ地域以外でフランス人民党の活動拠点となったのは地中海地域であり，マルセイユの党員数はおそらくパリを上回ったであろう。「マルセイユ独立共和国」との異名をとった同市では，サビアーニがほとんど絶対的な権力を行使した。マルセイユのほかではヴァール県，とくにヴィクトル・バルテレミーが指揮したアルプ・マリティム県，ローヌ回廊などでフランス人民党は勢力を定着させたが，これらは右翼過激主義に伝統的に好意的な地域であった。これらの地域とボルドー，クレルモン・フェラン，ランスあるいはルーアンなどの，いくつかの孤立した都市以外では，とりわけ農村部では，同党は安定した組織をもつことができず，その影響はきわめて小さかった。フランス人民党は，農村の「腐植土」についに根を下ろすことはなかったのである。

フランス人民党の地方支部は頻繁な組織の改編を経験し，幹部グループが全員入れ替わったりして，支部の党員数も大きく変動した[42]。ジャン・ポール・ブリュネは，フランス人民党はまるで「スフレ菓子（卵白やチーズを加えて，ふっくらと焼きあげた菓子）」のようだったと表現している[43]。その党勢が，結党後のきわめて急速な躍進と1938年初めまでの予想を越えた拡大のあと，状況が一変するや，同様に急速にしぼんでしまったからである。

このようなフランス本土の状況に，アルジェリアの特殊な事例をつけくわえなければならない。「植民地的状態から最大限の社会的正義と人間的可能性を引き出そう」と願ったレオン・ブルム（人民戦線内閣首相）とモーリス・ヴィオレット（国務相）が，イスラム教徒の家系に生まれたアルジェリア人に漸進的にフランスの市民権をあたえることを目的にし，さしあたり約2万人のイスラム教徒の「同化」を決めた法案（ブルム＝ヴィオレット法案）を下院に上程した（1936年12月30日）が[44]，もっと根本的

40) 竹岡前掲書, pp.863, 876; 竹岡敬温「フランス社会党（PSF）の誕生と発展－極右同盟から議会政党へ－（1）」『大阪大学経済学』第60巻第2号，2010年9月, p.28;「フランス社会党（PSF）の誕生と発展－極右同盟から議会政党へ－（2）」『大阪大学経済学』第60巻第3号, 2010年12月, p.45.

41) フランス社会党（PSF）が，結成後，このように広範な支持者の獲得に成功した理由については，竹岡上掲論文（1）pp.28-29,（2）pp.45-46参照のこと。

42) D. Wolf, *op. cit*., pp.219-222, 平瀬・吉田訳, pp.224-228.

43) J. -P. Brunet, *op. cit.,* p.230.

44) Edouard Bonnefous, *Histoire politique de la Troisième République*, Ⅵ *Vers la guerre: Du Front populaire à la Conférence de Munich (1936-1938)*, PUF, Paris, 1965, pp.28-30.

で決定的な改革を望んでいたイスラム教徒たちのあいだに同法案が引き起こした不満は，フランス人民党へのアルジェリア人の入党を増加させた。この結果，パリにいだヴィクトル・アリギの責任下に置かれていたアルジェリア支部（その主要な地方指導者はジャン・フォサーティ）の発表によれば，同支部の党員数は，おそらくパリやマルセイユを上回る2万人を越えるにいたった。

フランス人民党の党員たちは，入党前にはいかなる政治組織に属していたのであろうか。1936年11月9－11日の第1回全国大会のあと公表された，大会代議員（740人のうち質問状に答えた）625人の政治的前歴を示した統計[45]によれば，以前にはいかなる政党にも所属していなかったと申告したものが242人，すなわち38.7パーセントで最多数を占め，ついで左翼政党（共産党，社会党SFIO，急進党，ネオ・ソシアリスト，プロレタリア統一党）の元党員が207人，すなわち33.1パーセントを占めた（その内分けは共産党133人，21.2パーセント[46]，社会党SFIO54人，8.6パーセント，急進党12人，1.9パーセント）。他方，民主同盟（5人）などの伝統的右翼とキリスト教系政治グループに所属したものはきわめてすくなかった（28人，すなわち4.5パーセント）のにたいして，極右同盟に加盟していたものは148人で大会出席者の4分の1近く（23.6パーセント）を占め，その大多数は火の十字架団と国民義勇軍（合わせて91人，14.5パーセント），アクシヨン・フランセーズ（32人，5.1パーセント）の元団員であり，その他の極右同盟の出身者は少数にとどまった（ピエール・テタンジェの愛国青年同盟8人，ジャン・ルノーのフランス連帯団10人，マルセル・ビュキャールのフランシスム7人）。

代議員として第1回全国大会に出席したこれらのフランス人民党の初期幹部たちにかんする統計の部分的性格にもかかわらず，これらの幹部の政治的前歴と党指導部のそれとのあいだで，明白なずれのあったことが分かろう。党指導部を形成する政治局の，ドリオ以外の7人のメンバーのうち6人までが元共産党員ないし共産主義者であり，そのうち4人は元「サン・ドニ地区多数派」に属していた。政治局メンバーはドリオの直接の補佐役であり，かれらにたいするドリオの信頼は不可欠であり，かれの意志が大多数の意志でなければならなかったからであろう。また，党指導部には中道派，穏健左翼，穏健右翼出身者がきわめてすくなく，元社会党（SFIO）員さえも比較的少数であったのにたいして，極右同盟出身者がかなりの比率を占めていたという事実から，党内の意見交換は右翼過激派と革命派とのあいだで――たぶん極左から極右への場合が多かったであろう――おそらく両者が嫌っていたであろう「中庸派」を素通りしておこなわれたと推察できよう[47]。

フランス人民党の党員たちの社会職業的構成については，1936年11月と1938年3月の2つの全国大会の代議員たちの，職業分布にかんする同党公表の資料によってうかがうことができる。それによると，生産労働者の比率がもっとも大きいが，フランス人民党への元共産党員の大量入党に加えて，混乱のなかでの多数の失業者の入党，マルセイユのヴェテラン政治

---

45) *L' Emancipation nationale* et *L' Emancipation,* 14 novembre 1936; D. Wolf, *op. cit*., pp.190-191, 平瀬・吉田訳, pp.200-201; J. -P. Brunet, *op. cit*., pp.230-231; R. Soucy, *op. cit*., pp.236-237, (traduction française) *op. cit*., p.334.

46) これにたいして，ゼーフ・ステルネルは，元共産党員がフランス人民党政治局メンバーの90パーセントを構成していたときでさえ，全国レヴェルでは，元共産党員は「同党の一般党員の10パーセント以上を占めることはなかった」と主張している。Zeev Sternhell, Precursors of Fascism in France, in Stein Larsen ed., *Who were the Fascist* ?, Universitetsforlaget, Bergen, 1980, p.483.

47) J. -P. Brunet, *op. cit.,* p.231.

家シモン・サビアーニのまわりに集まったマルセイユ港の担ぎ人夫たちなど，ときには暴力団と公然と結びついた限界的社会グループの党への吸収が，このようなプロレタリア的要素の優越――その特徴は下部党員のレヴェルではいっそう明瞭であった――の原因であったろう。しかし，その生産労働者の比率は，2つの大会のあいだではっきりと下落している（49パーセントから37パーセントに）。農民は第1回大会では62人（8.4パーセント），第2回大会では52人（5.3パーセント）である。また，第1回大会では，さまざまな種類のホワイトカラー（事務労働者）の占める比率が20パーセント近く，自由業，商人の比率が21パーセント近くであったのにたいして，第2回大会では，技師，自由業の比率が約18パーセントであり，ホワイトカラー（事務労働者），公務員に「中産階級（詳細不明）」の代議員を加えた比率は40パーセント近くを占めている。

統計の不正確さにもかかわらず，全体として，第1回大会と第2回大会とのあいだで，代議員――その構成が下部党員のそれを正確に反映していたとはいえないであろうが――のなかの生産労働者の比率が下降し，これにかわって，ホワイトカラー（事務労働者）と「中産階級」グループの比重が大きくなっていることが分かる[48]。このように，全国大会に出席した代議員にかんしてみるかぎり，フランス人民党の社会構成があきらかに変化していて，結党後1年半のあいだに，同党は，イタリアの国民ファシスト党やドイツのナチスなどの，ヨーロッパの大ファシスト団体の古典的特徴に近づいたということができようか。

しかし，工場内のフランス人民党支部とその党員数の動きについては，同党の定期刊行物からは明確な情報をほとんど引き出すことができない。企業内支部にかんする情報の公表を差し控えたのは，ほとんどの工場でフランス人民党は弱体な少数派でしかなく，したがって，フランス共産党の工作活動の強い影響を受けた労働組合や共産党細胞との表立った衝突を戦術上の理由から避けなければならなかったからであろうとおもわれる。工場内では，「この頃，フランス人民党グループの活動は，一種の地下活動に限られていた。そのうえ，1937年以後は，フランス人民党の企業内支部は，雇い主と協力して，偽装された“黄色”組合であるとのうわさをたてられていた」，「1938年10月，フランス人民党党首がルノー支部の責任者から受け取った報告によれば・・・フランス人民党の党員は400人で，そのうち活動的なメンバーは100人であったのにたいして，共産党細胞のメンバーは7,500人もいた」とディーター・ヴォルフは書いている[49]。

下部党員にかんしては，きわめて局地的にし

[48] *L' Emancipation nationale,* 14 novembre 1936 et 19 mars 1938; D. Wolf, *op. cit.*, pp.191-192，平瀬・吉田訳，p.200; J. -P. Brunet, *op. cit.*, pp.231-232. ただし，フィリップ・ビュランは，フランス人民党の機関紙が発表した党員の政治的前歴や職業分布にかんする数字の信憑性について疑問を投げかけている。

フランス人民党は1936年，1938年，1941年，1942年に開催した全国大会ごとにその出席者の職業，同党入党以前の所属政党にかんする情報を提供したが，ビュランは（1）代議員全体に占める労働者の比率が，1938年の大会（35パーセント）を例外として，比較的一定である（1936年は49パーセント，1941年は51パーセント，1942年は50パーセント）こと，（2）以前の所属政党については50パーセントが「所属政党なし」で，他の50パーセントは左翼と右翼にほとんど均等に分かれていること，（3）元共産党員の比率が大会出席者の5分の1から6分の1を占め，同党が決定的に極右団体の姿をとったときでさえも，党員数のなかで元共産党員が同じ比率――1937年1月には党員数12万人のうち元共産党員2万2,000人（*L' Emancipation nationale,* 30 janvier 1937），1937年4月には18万人のうち3万5,000人（*L' Emancipation nationale,* 10 avril 1937），1938年1月には25万人のうち4万人（*L' Emancipation nationale,* 14 janvier 1938）――を占めていることなどの事実は，これらの数字の使用に警戒心を抱かせるものであるとし，フランス人民党が同党自身と同党がつくりあげようと望んでいた社会についての望ましいイメージの真実性を立証するために，全国大会の出席者の構成に配慮したのであろうと判断している。Ph. Burrin, *op. cit.*, p.284.

[49] D. Wolf, *op. cit.*, pp.221-222, 平瀬・吉田訳, p.228.

か情報をえることができない。サビアーニによれば，マルセイユを中心とするブーシュ・デュ・ローヌ県では，1937年春のフランス人民党の党員のうち，（語のもっとも広い意味での）労働者の比率が78パーセントと圧倒的に高く，その他の党員は商人，工場経営者，家内工業の職人，農民であった[50]。他方，サン・ドニでは，1938年3月に2,973人の党員について発表された職業分布では，（無職の家事労働者を差し引けば）自由業および工場経営者3.2パーセント，商人および職人12.7パーセント，ホワイトカラー（事務労働者）14.1パーセント，生産労働者69.8パーセント（そのなかでの比率は冶金工60パーセント，建築労働者15.5パーセント，皮革工業の労働者6.4パーセント，化学工業の労働者6.2パーセント）であった。ジャン・ポール・ブリュネは，したがって，1938年3月においても，「フランス人民党は大労働者都市サン・ドニの社会学的プロフィールにほぼ合致していたようだ」といい，フランス人民党の社会的構成において「中産階級」，商人，工場経営者，自由業の比重が比較的高く，しかも，1936年11月から1938年3月までの1年半のあいだに，その比率がさらに高まっているというのは，下部党員よりも幹部層についていえることであり，下部党員のレヴェルでは，おそらく労働者は他の職業よりずっと大きい割合を占めたのではないかと推論している[51]。

しかしながら，1936年から1939年までに4,000人から7,000人に増加したと推定されるマルセイユのフランス人民党の党員数のうち，第2次世界大戦後にまで残された断片的な記録にもとづいて，426人（このうち身元の確認できたもの408人）のサンプルを分析したポール・ジャンコウスキーの研究[52]によれば，生産労働者の比率がわずかに6パーセントでしかなかったのにたいして，「中産階級のうちもっとも“プロレタリア的な”階層の」職人7パーセント，小売店主9パーセント，事務労働者11パーセント，公務員20パーセント，「商人，工場経営者，ジャーナリスト，弁護士，医師，その他の自由業従事者」25パーセントであった。この最後の「ブルジョワジー」の比率は，1936年以前のサビアーニ支持者のうちでは6パーセント以下でしかなかったが，その後，急速に上昇していて，それは，ジャンコウスキーによれば，フランス人民党の「比重の社会的中心」が下層階級から中流階級へシフトしたことを示している。そして，ジャンコウスキーは，1937年春にフランス人民党の党員の78パーセントが労働者であったというサビアーニの主張は「途方もない空想」であると批判し，「426人のサンプルのうち，わずかに28人だけが熟練ないし不熟練労働者であり，労働者の比率は初期のサビアーニの組織のときの水準から急激に低下していた」と結論している[53]。

同様に，ケヴィン・パスモアは，「元共産党員からのドリオの支持は，歴史家たちによって過大視されてきた。リヨン，マルセイユ，アルプ・マリティム県の地域的研究は，フランス人民党が共産党の支持層に食い込むことに失敗し，それまで保守派の運動に好意的であったプティ・ブルジョワやブルジョワ的工場経営者への依存を強めていったことを示している」と書いている[54]。

しかし，ドリオは，フランス人民党が労働者だけでなく職人，工場経営者，商人，公務

---

50) J.-A. Vaucoret, *op. cit*., p.413.

51) J. -P. Brunet, *op. cit*., pp.231-232; Jean-Paul Brunet, *Saint-Denis la ville rouge 1890-1939*, Hachette, Paris, 1980, pp.407-408.

52) Paul Jankowski, *Communisme and Collaboration: Simon Sabiani and Politics in Marseille, 1919-1944*, Yale University Press, New Haven, 1989.

53) P. Jankowski, *ibid*., pp.60, 63-65.

54) Kevin Passmore, The French Third Republic: Stalemate Society or Cradle of Fascism?, *French History*, Ⅶ, no. 4, 1993, p.444.

員，ジャーナリストその他の自由業従事者などの「中産階級」によって構成されていた現実について，「階級的憎悪がもっとも広がっているもっとも困難なときに」，「わが党はすでに和解した小フランスの観を呈している。それは明日のフランス全体のモデルである」とのべ[55]，みだりに事実を曲解しようとはしなかった。

党員たちの親しい関係を示すしるしのひとつは，ヴィクトル・バルテレミーがその回想録のなかで想起しているように，「君僕で呼び合う革命的な親しい話し方」を採用したことであり[56]，それはベルトラン・ド・ジュヴネルの心をとらえ，それまで政治の世界では経験したことのなかった温い関係の表現として，かれを魅惑した。「フランス人民党にはいることは，わたしにとってはまったく新しい世界に入り込むことであり，そこでは党員たちの態度，関係，言葉はわたしが慣れ親しんでいたものすべてと対照的であった。わたしはいつも自分を“左翼”すなわち民衆の味方であると称してきたが，しかし，民衆にはいつも無縁な人間であった・・・わたしが民衆と接触したのは，サン・ドニに深く入り込み，食事を共にし，君僕で話し合う習慣を身につけることによってであった。そして，そのことにわたしは深く感動した」とド・ジュヴネルは書いている[57]。

このような党内の民衆的熱気やドリオのカリスマ性に引きつけられて，幾人かの著名な知識人がフランス人民党に入党した。1938 年 1 月 14 日の『国民解放』紙は，ノーベル賞受賞者アレクシス・カルテル，パストゥール研究所教授エルネスト・フールノー，医学アカデミー会員ヴィクトル・バルタザール，作家やジャーナリストのピエール・ドリュ・ラ・ロシェル，ジョルジュ・シュアレス，ラモン・フェルナンデス，ジャン・フォントノワ，ポール・ジャック等を党のメンバーとして発表した[58]。また，1925 年にはジョルジュ・ヴァロワのフェソー団[59]の「ファシスト的」日刊機関紙『新世紀』に寄稿し，1932 年にはアカデミー・フランセーズ会員に選ばれたアベル・ボナールはシンパとして名をあげられた。さらに，この年，1938 年には，ボナールはサン・ドニを訪れ，ドリオの即興で巧みな演説に感動した結果，フランス人民党に入党している。マルセイユでは，1936 年 6 月までは，必要なときには悪事の手先たちの集団を使っていたサビアーニとかれの運動組織は，知識人や市のブルジョワたちから軽蔑されていたが，フランス人民党に合流して以後は，サビアーニの支持者は一新され，知識人，大学教員，自由業従事者，「善良なブルジョワたち」がそれに加わった[60]。

しかしながら，知識人たちは，フランス人民党の政治路線にあまり影響を及ぼさなかったとみられる。自由業従事者と知識人との組織担当者に任命されたラモン・フェルナンデスは，「当然，フランス人民党にとっては，なによりも政治が第 1 であり，知的路線はわれわれの指導者と活動家たちの判断を他の分野に転置させてしまうことにしかならないので」，知識人のメンバーは党から「知的路線」を取り除くために協力しなければならない」と書いている[61]。

55) J. Doriot, *La France avec nous!, op. cit.*, p.120.
56) V. Barthélemy, *op. cit.*, p.106.
57) B. de Jouvenel, *op. cit.*, p.294.
58) *L' Emancipation nationale,* 14 janvier 1938, D. Wolf, *op. cit.*, p.224, 平瀬・吉田訳, p.230; J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.233.
59) アクシヨン・フランセーズからの脱退者ジョルジュ・ヴァロワが 1925 年 11 月に結成し，イタリアの政治的語彙から名称を借用したフェソー団は，フランス最初のファシスト集団であったとする点で，多くのフランスの現代史家たちの意見は一致している。深澤民司『フランスにおけるファシズムの形成－ブーランジスムからフェソーまで－』岩波書店，1999 年，pp.309-374，第 7 章「ジョルジュ・ヴァロワのファシズムとフェソー」; 竹岡前掲書, pp.67, 726, 732-733, 735, 757, 761, 941-942.
60) J.-A. Vaucoret, *op. cit.,* p.412.
61) *L' Emancipation nationale,* 11 mars 1938,《Le PPF et le pays intellectuel 》; Patrice Hollemart, *L'idéologie de L' Emancipation nationale, 1936-1939,* Mémoire de l' Instituet d' Etudes Politiques de Paris, 1980, p.61.

ラモン・フェルナンデスは，ドリュ・ラ・ロシェルの著書『ドリオとともに[62]』を読み，それに感激して，フランス人民党に入党したのであったが，ドリュ・ラ・ロシェルについては，「ドリュはひとりの指導者，かれの指導者に出会った。戦後の道徳や秩序を壊乱するあらゆる細菌にさいなまれたひとりの知識人にとって，それがなにを意味していたか想像したまえ。それは，知識人ドリュがかれのいるべき本当の場所，つまり従属的な地位を受け入れることを意味していたのである」と書いている[63]。

党を結成し組織するために，フランス人民党は相当な金額を費やした。1936年10月初めに，同党はパリのど真中，オペラ座とチュイルリー公園のあいだにあるピラミッド街10番地に7階建てのビルを手に入れた。このビルを全面的に改修した党本部の建物（「党の家」と呼ばれた）には党の中央諸機関が収容され[64]，そこでは多数の専従職員が働いた。同年11月には，党は，『解放』紙の全国版を発刊した。さらに，第1回全国大会の費用を捻出しなければならなかった。地方代議員の旅行費，パリ滞在費を含めると，その費用はざっと50万フランに達した[65]。翌年には，ドリオは　サン・ドニで映画館を手に入れ，当時，苦境に陥っていたパリの日刊紙『自由』（その所有者はロレーヌ地方選出の代議士デジレ・フェリーで，かれは1920年代末には愛国青年同盟に所属していたが，1936年4－5月の総選挙で落選し，同年末には，かれの新聞の経営も苦境に陥った）を買収した。しかし，やがて同紙は，フランス人民党にとっても，大きな財政的負担となることがあきらかになった[66]。宣伝活動費も巨額であった。党は大量のポスター，びら，パンフレットを印刷し，冬季競輪場やマジック・シティのような，集会用の大きな会場を何度も借りなければならなかった。

この莫大な出費のなかで，党員たちの分担金は微々たる額であった。1936年には，党員証は年額3フラン，毎月の分担金（党費）は5フラン（失業者は1フラン，月収2,000フラン以上の党員は10フラン）であった[67]。フランス人民党結成以後1938年初めまで同党の経理係であったマルセル・マルシャルは，党発足時，サン・ドニ市役所内のかれの事務所で，毎日，山のような激励の手紙と寄付の申し込みを受け取った。それらの寄付金の金額はまちまちで，その多くはささやかな額であったが，しかし，多額の寄付もあり，全体としていえば，「この時期には，もっともすくない日でも，1日2万フランの収入があった」とマルシャルは証言している[68]。しかし，おそらく，このような時期はそれほど長くは続かなかったであろう。また，第1回全国大会のために1936年10月末に開始された募金計画は大きな成功をおさめ，『国民解放』紙によれば，15日間で10万フランが集まった。応募者のなかには匿名のものも多く，人民戦線の勝利がブルジョワジーや中産階級のかなりの部分をおびえさせていた時期であったので，このように広範な層からの寄付や募金の申し込みがあったのであろうが，実際には，集まった醵金の主要部分は経営者団体からの出資であったことは疑いない。

1945年にフランス人民党の経理主任エミール・マッソンが逮捕されたとき，かれは――ピ

62) P. Drieu La Rochelle, *Avec Doriot, op. cit.*, Gallimard, Paris, 1937.

63) *L' Emancipation nationale,* 31 juillet 1937,《Avec Doriot》; P. Hollemart, *op. cit.*, p.61.

64) V. Barthélemy, *op. cit.*, p.124.

65) *Archives de la préfecture de police de Paris,* B/a 337, dossier 7, pièce du 13 novembre 1936.

66) *Archives de la préfecture de police de Paris,* B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 13 mai 1937; D. Wolf, *op. cit.*, p.198, 平瀬・吉田訳, p.206.

67) *Archives de la préfecture de police de Paris,* B/a 337, dossier 2, rapport sur PPF, juillet 1936.

68) J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.234.

エール・ピュシューが 1937 年か 1938 年にドリオに手渡したものとおもわれる――総数 240 名に及ぶ寄付者（さまざまな企業，団体）の名をタイプで打った 11 ページのリストをもっていた。リストには 8 つの大銀行（ヴェルヌ銀行，ロッチルド銀行，ドレフュス銀行，ラザール銀行，全国商工業銀行，インドシナ銀行等），経営者団体（商工業センター他），冶金，自動車，食品関係の工業企業などの名があげられていた[69]。また，パリ警視庁文書館のドリオ関係資料[70]は，経営者団体（石炭鉱業中央委員会，フランス雇い主組合クラブ，全国経済発展協会等），さまざまな圧力団体（ビリエ上院議員の経済利益連盟など），新聞社社長（週刊紙『シラノ』社長アンドレ・パイエ，『ショック』紙のギヨーム大佐），銀行家，実業家（ノール県の毛織物業者他）などによって提供された多額の資金援助について報告した書類でいっぱいであり，そのなかの書類のひとつは，巨大製鉄業の経営者で製鉄協会会長であり，共和派連盟の議員として上院の右翼のあいだに大きな権力をもっていたフランソワ・ド・ヴァンデルが，1937 年 6 月に，『自由』紙の期限の迫った手形の支払いを保証したことをあきらかにしている[71]。

これらの企業や団体のほかに，発足時のフランス人民党の資金調達に重要な役割を演じ，その後も財政的援助をしつづけたとおもわれる人物として，2 人の氏名をあげなければならない。ヴォルムス銀行の専務取締役ガブリエル・ル・ロワ・ラデュリーと，製鉄業の経営者団体，鉄鋼委員会を介して，フランス人民党にとって豊富で規則的な収入源の役割を演じたピエール・ピュシューである[72]（1938 年秋のかれの離党は，同党を深刻な財政危機に陥らせた）。

これらの資金援助の大部分はフランス人民党の公式帳簿には記載されず，ドリオの指示に従って，党の中央財政委員会と機関紙発行部に多かれ少なかれ内密に振り分けられた。エミール・マッソンの証言によれば，党の中央財政委員会は，1937 年には 436 万 7,000 フラン，1938 年には 571 万 3,000 フラン，1939 年には 159 万 3,000 フランを自由に使えるようにドリオにゆだねたという[73]。

このように，フランス人民党が最初から経済界の主要グループから多額の資金援助を受けることができたのは，同党が結成されたときの政治的，社会的状況のためでもあった。1936 年 4 － 5 月の総選挙における人民戦線の勝利と 5 月末から 6 月初めにかけて全国的に広がった坐り込みストライキの波が，財界と右翼の世界に引き起こした不安，スペインの人民戦線政府にたいするフランコ将軍のクーデタによってかき立てられた復讐の願望，さらに，人民戦線政権による極右同盟解散のあと，最大の極右同盟，火の十字架団を議会政党，フランス社会党（PSF）に変えたフランソワ・ド・ラ・ロックの穏健化路線への転換，これらすべてがフランス人民党に右翼諸新聞の熱狂的な支持を集め，極右の人物たちを集結させ，財界からの物質的支援をえさせたのであった[74]。

1936 年 6 月 28 日にサン・ドニでフランス人民党が結成されたのは，このような状況下においてであった。ドリオ自身，1938 年に公刊される著書『フランス改造』のなかで，フランス人民党の基本的性格が結党時の社会的状況の影響をつよく受けたことを強調して，つぎのように書いている。「フランス人民党の基本的性格

69) D. Wolf, *op. cit*., p.211, 平瀬・吉田訳, pp.217-218.
70) *Archives de la prefecture de police de Paris,* B/a 341, dossier 8310-1.
71) J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.235.
72) D. Wolf, *op. cit*., pp.172-174, 平瀬・吉田訳, pp.177-179.
73) D. Wolf, *ibid*., pp.210-211, 平瀬・吉田訳, pp.216-217, 233; J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.236.
74) Ph. Burrin, *op. cit*., p.281; J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.204-206.

は，大きな社会的戦争のさなかに党が生まれたことに起因している。数か月まえなら，サン・ドニの元共産党員たちと若き国民義勇軍との連携など不可能におもわれたであろうし，また，労働者と雇い主との連合もありえないとおもわれたであろう。これらの人びとすべて，これらの運動すべてをわれわれの旗の下に集めることが必要となったのは，1936年6月にフランスが受けた大きな社会的試練のためであった。われわれはひとつになって，社会的戦争状態，内戦を防ぐ手だてを探し求めねばならないことに同意したのである[75]。」ドリオによれば，フランス人民党はなによりも「社会的平和」の党であり[76]，社会的平和の実現には階級間の争いを終わらせることが必要であった。かれにとっては，フランスを破滅から救うことができるのは，経営者と労働者とのあいだの協調的な関係のみであった。

一方，地方支部は自分自身の財力で活動を続けなければならず，地方レヴェルでも，献金者探しが真剣におこなわれた。党指導部の「一般方針」は，地方支部にたいして，規則的な資金援助によって党をひそかに支持してくれる，シンパの献金者で構成された地方財政委員会を設立するよう勧告していた。たとえば，マルセイユでは，サビアーニの運動組織は，1934年10月以前から，市のブルジョワジーや船舶艤装業者たちから資金援助を受けていたが，1936年6月以後は，船舶艤装業者のフレシネ，ラカーズ海軍大将，ウージェーヌ・ピエール元市長，新聞社社主のジャン・ガイヤール・ブーラジャ，マルセイユ市ガス・電気会社などがフランス人民党ブーシュ・デュ・ローヌ県連の主要な献金者となった[77]。また，化学企業のローヌ・プーランク社が，リヨン地域のフランス人民党代表であったアルベール・ブーグラにたいして，1937年にかれがそれまで化学技師として働いていた同社を退職したあと，1944年まで，なんの代償も要求せずに，5,000フランの月給を支払いつづけた[78]のも，フランス人民党にたいする実質的な資金援助の例としてあげることができよう。フランス人民党のきわめて不均一な地理的定着を理解する鍵は，このような企業やスポンサーによる財政的援助の可能性いかんにもあった。

ヴィクトル・バルテレミーは，その回想録のなかで，フランス人民党が受けた巨額の資金援助のおかげで，同党が財政困難を免れたことは明白な事実であるが，ドリオと党指導部がこれらの資金援助にいささかもしばられなかったこともまた，同様に明白な事実であると書いている。そして，ドリオが「わたしにとっても，党にとっても，党員たちの規則的な分担金以外の入金は贈り物とみなすべきである。この贈り物が100フランであろうと1000万フランであろうと，そんなことはどうでもよい。1000万フランを党に提供してくれた人が100フラン，あるいは10フランでも党に差し出してくれた人と同じ権利しかもたないことはもちろんである」とかれにいった言葉を引用し，「それが1936年におけるドリオの党財政にかんする信念であり，死ぬまで，かれはその信念を捨てなかった」と書いている[79]。しかし，たとえ信念がそうであったとしても，事実はかなり違っていたといわなければならない。

まず，フランス人民党はたえず資金が不足していた。1937年から1938年初めにかけて，同党は，ボルドー地域の幹部で，とりわけ『自由』紙の買収に貢献した大金持ちの公共土木事

---

75) Jacques Doriot, *Refaire la France*, Grasset, Paris, 1938, p.107.

76) J. Doriot, *ibid*., p.106.

77) J.-A. Vaucoret, *op. cit.,* pp.335, 342, 415; D. Wolf, *op. cit*., pp.208-209, 平瀬・吉田訳, pp.215-216; V. Barthélemy, *op. cit*., pp.116-117; J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., p.236.

78) *Archives Nationales,* Cour de Justice de la Seine, dossier Beugras-Celor, Exposé du Commissaire du gouvernement.

79) V. Barthélemy, *op. cit*., pp.113-114.

業請負業者，ジャン・ル・カンからの寄付を頼りにしていた。かれは，1937 年 5 月に，フランス人民党政治局メンバーに加わっていた。ところが，1937 年 11 月，日刊紙『自由』の管理をめぐって，ドリオとル・カンとのあいだで激しいいさかいが生じた。それにもかかわらず，1938 年 1 月，ドリオは，ル・カンに，党本部と『自由』紙の専従スタッフの給料を月末までに支給するのに必要な金額を出してくれるよう要求した。ル・カンは，しばらくためらったのち，要求に応じた。しかし，2 月半ば頃，かれは専従スタッフの給料がまだ支払われていず，かれの提供した資金が他の用途に使われたことを知った。2 人のあいだにまたもや激しい口論が起こり，その結果，ル・カンはフランス人民党との関係を一時断った[80]。この例からもみるように，フランス人民党の資金繰りは，けっして安定していたわけではなかった。

別の例をあげよう。1938 年 3 月初め，ドリオはポッゾ・ディ・ボルゴ夫人を訪問している。ポッゾ・ディ・ボルゴは元火の十字架団の副委員長であったが，委員長フランソワ・ド・ラ・ロックの「穏健な」行動や「合法主義」に不満を抱き，後継組織の合法政党，フランス社会党（PSF）への参加を拒否したあと，極右秘密結社「カグール団」（1935 年に結成。アクシヨン・フランセーズの過激少数派と極右諸同盟のメンバーとで構成された革命行動秘密委員会の俗称）の指導者たちと行動を共にして，ド・ラ・ロックの不倶戴天の敵になっていた。1937 年 11 月 26 日，かれは「カグール団」の陰謀事件に巻き込まれて逮捕され，仮釈放されたばかりであった。ドリオはポッゾ・ディ・ボルゴ夫人に『自由』紙の活動が彼女の夫の釈放に決定的な役割を果たしたことを強調し，彼女から，感謝のしるしとして，フランス人民党の宣伝基金のために 50 万フランの小切手を受け取った。このとき，ドリオは喜びを隠さず，「また同じことをやる」とはっきりいったという[81]。このような「気前のよい」巨額の資金援助に，ドリオはいささかも「しばられる」ことはなかったであろうか。その後，ドリオは，裁判でのポッゾ・ディ・ボルゴの主張を支持し，それはかれとド・ラ・ロックとの関係を複雑にしたのである。

ドリオが警察の秘密資金を受け取っていたのではないかとおもわせる，もっと深刻な例さえある。1934 年 2 月から 1941 年まで警視総監だったロジェ・ランジュロンが 1946 年に公刊したその「私的な」日記のなかで，1940 年 7 月 31 日（それはすでに，フランスの軍事的崩壊後，ペタンを国家主席とするヴィシー政権が成立して，3 週間が経った日であった）の日付で「ドリオからの奇妙な訪問を受けた。かれは，わたしに，あまり遠回しにではなく，万一の場合には調停役を引き受けることを申し出た。かれが金のことを話さなかったのは，このときがはじめてである。以前には，しょっちゅう金のことを話していたのだが」と書いている[82]。第 2 次世界大戦後に公刊した日記のなかで，ランジュロンがドリオにかんして虚偽の話をつくりあげたということは十分ありうるとしても，しかし，ドリオが――おそらく 1939 年のことであったろう――パリ警視庁の秘密資金の援助を懇請したということもまた，まったくありえない話ではなかったであろう。ドリオがそこから引き出すことができた資金はきっと少額であったにちがいないが，しかし，もし，これが事実であったとすれば，たとえば政治制度

[80] *Archives de la préfecture de police de Paris,* B/a 341, dossier 8310-1, pièces des 17 novembre 1937 et 9 mars 1938. まもなくル・カンはドリオの傘下に戻ったが，その後のドリオとル・カンとの関係は，不仲と和解の交替を繰り返すことになる。J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.237.

[81] *Archives de la préfecture de police de Paris,* B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 9 mars 1938,《Confidentiel》.

[82] Roger Langeron, *Paris, juin 1940*, Flammarion, Paris, 1946, p.137.

の改革にかんしてフランス人民党が抱いていた構想において，同党が公権力や体制側にたいして「独立的」でありつづけることができたとは考えにくい[83]。

また，フランス人民党は，外国からも資金を受け取っていた。ヴィクトル・バルテレミーは，同党ニース支部主催の会議のとき，同じコルシカ出身で気が合っていたヴィクトル・アリギと長い会話を交わしたが，そのときアリギはイタリアから帰国したところで，かれは外相チアーノその他のイタリアの指導的政治家たちとのあいだで交わした会談について話してくれた，と回想録のなかで語ったあと，つぎのように書いている。「アリギは，チアーノから手渡された30万フランをローマから持ち帰っていた。フランス人民党の財政が潤沢であっただけに，わたしは，この外国からの資金提供を知って驚き，ショックを受けた。これにたいして，アリギは，イタリアからの資金援助には，物質的援助以上に“共鳴”の意志をみなければならないが，実は，その意志は，党にたいする財政的援助という以上に，かれ自身にたいして示されたものなのだといった。それは比較的ささやかな金額であった[84]が。」アリギは，1936年7月以来，フランス人民党にとって，イタリア外務省との特別の交渉相手をつとめていたが，ヴィクトル・バルテレミーにたいしてだけでなく，ドリオの幾人もの腹心たちに秘密を打ち明けていたようである。

パリのイタリア大使館公使ランディーニは，1936年9月7日，アリギが，かれに，フランス人民党の党員募集は順調に進んでいるが，しかし，組織上の問題が若干あり，フランス人民党には，ほどほどに武器を装備するためにも，週刊の『国民解放』紙を日刊に変えるためにも，十分な資金がなく，党は「これらのことが可能になるようにドイツが申し出た資金提供を拒否したが，しかし，イタリアからの援助は即刻受け入れるつもりである」ことをあきらかにした，とローマのイタリア政府に報告している。そして，ランディーニは，「わたしはかれの申し入れをしっかりと確認し，万一に備えて，それをお伝えしておきます。ただし，わたしの考えは変わらないのですが，ドリオというカードが有効であるかどうか，いまも疑問におもっています」とチアーノのためにコメントを付している[85]。この1年後，チアーノは，その「政治日記」のなかで，1937年9月2日の日付で，「ドリオの信頼する腹心の部下（ヴィクトル・アリギのことであろう）がわたしに資金を継続して援助してくれるよう要求し，武器も欲しがっている」と書きとめ，そして，その翌日には，「ドリオには金をあたえよう。しかし，武器は渡さない」と決断している[86]。

これらの事実から判断して，フランス人民党はイタリアから規則的な資金提供を受けていたと考えることができよう。さらに同党は，フランスにもし内戦が起こった場合，共産党の反乱を制圧するのに役立つであろうとおもわれた武器の供給をムッソリーニの政府に要請していたようなのである。フランス共産党のモスクワへの財政的依存をドリオは繰り返し非難したが，これらが事実であるとすれば，その非難も力を失うであろう。たとえ，イタリアからの援助がソ連の援助よりまちがいなくはるかに小さかったとしてもである。これにたいして，ドリオは，外国から資金援助を受けていることを否定しつづけた。ドリオの政敵たちは，とくにかれとナチス・ドイツとの結託を非難したが，第2次世界大戦以前には，フランス人民党がドイツから資金を受け取っていたという事実はなかったようである。それにもかかわらず，同党がド

83) J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.238.
84) V. Barthélemy, *op. cit.*, p.123.
85) Max Gallo, *Cinquième colonne*, Plon, Paris, 1970, p.205 に引用されたイタリア外務省文書館保管の書類。
86) M. Gallo, *ibid.*, p.55.

イツの援助を受けているという噂が執拗に流された。たとえば，ポール・レノー（1940 年 3 月 21 日からペタンに政権をゆだねるまで首相）は，その回想録のなかで，「ドリオは，『国民解放』紙と『自由』紙を発行するために，ドイツ帝国によって買収されていた」と書いている[87]。

重工業界とフランス人民党との仲介者として，同党の重要な収入源の役割をつとめたピエール・ピュシューは，1943 年 5 月，アルジェでフランス警察によって逮捕され，特別軍事法廷で死刑を宣告されて，1944 年 3 月 20 日に銃殺される[88]まえに，獄中で回想録をしたためている。のちにかれの未亡人によって公表されたこの回想録のなかで，ピュシューは「ついに，わたしは，1938 年秋に，わたしの知っていた党の公式金庫の裏に，外国からきた資金を入金した，わたしの知らない秘密の金庫があるのを発見した。今日でも，わたしは，これらの資金がさまざまな出所からもたらされたものなのかどうかよくは知らないが，しかし，すくなくとも，ファシスト起源の何百万もの資金の譲渡があるという証拠を握ったのである。わたしは，驚きのあまり，部屋の扉や窓を乱暴にぱたんと閉めた」と証言している。そして，「新参のうわべだけのナショナリストのつらをした元コミンテルンの寵児のお定まりの行動」という辛辣な表現で，ドリオの態度を批判している[89]。

フランス人民党は，きわめて中央集権的に運営されていた。結成時に採択された党規約は，たとえば，大会による上層部決定機関メンバーの選挙や「委員長」の後盾の下での集団的指導などを決めていて，見かけは民主的につくられていた。しかし，結成当初から，規律遵守と「党首」と呼んでいた人物への服従は全面的であった。これらの点について，ドリオは，第 1 回全国大会の演説のなかで，つぎのように語っている。「規律は規律である・・・党員は，自分たちが全体的大義のためにたたかっているのであって，個人的信条のためにたたかっているのではないことを知らなければなりません・・・党指導部はつねに反対意見，提案，礼儀正しい公平な批判を歓迎します。指導部は全知全能ではありません。指導部は党員たちの生活について知らなければなりません。そのために，指導部は党内で話されているすべてのことに熱心に耳を傾けるのです。指導部は党をわれわれの思考の巨大な実験室とみなします。指導部の担うべき役割は，そこから行動と結びつく理念，指令，行動のためのスローガンを引き出すことです。指導部が学ばなければならないのは，君たちの集団的生活のささやきからです。しかし，指導部が話しかけ，その考えを明確にしたときには，われわれは全員一致して同じことを繰り返すことが大切です・・・偉大な変革に必要な集団的な固定観念は，考え方の微妙な差異にたいする揚げ足取りによってはつくられません。それは同じ思考，同じ方式の繰り返しによってつくりあげられるのであり，それらを

87) Paul Reynaud, *Au cœur de la mêlée 1930-1945*, Flammarion, Paris, 1951, pp.67, 278; D. Wolf, *op. cit*., pp.212-216, 平瀬・吉田訳, pp.218-221; J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.234-239.

88) ピエール・ピュシューは，1941 年 8 月 11 日，ヴィシー政権の内相に就任したが，1942 年 8 月に政権に復帰したラヴァルによって辞職させられた。1942 年 10 月，ピュシューは，ラヴァル政権打倒のときがきたと確信し，ペタン元帥に，フランスが北アフリカで英米に味方して戦争に立ち戻るべきだと勧告した覚書きを手渡し，1942 年 11 月 11 日から 12 日にかけての夜，スペインに脱出し，そこからアフリカに渡るために船に乗り，1943 年 5 月 6 日，カサブランカで下船したが，フランス警察によって逮捕された。かれはアルジェの刑務所に移され，1944 年 3 月 4 日から開かれた特別軍事法廷で死刑を宣告され，1944 年 3 月 20 日，銃殺刑に処せられた。判決が執行されないよう願った裁判官の請願にもかかわらず，ド・ゴール将軍は，「国家的理由」を口実にして，恩赦を拒否した。この裁判の結末は，ペタン元帥とヴィシー政府にたいしてド・ゴール派の正当性の名において開始されたたたかいの説明不能な性格を際立たせるものであった。D. Venner, *op. cit*., pp.639-640.

89) P. Pucheu, *op. cit*., p.140.

繰り返し繰り返しいわなければなりません。同じ真理を百度繰り返しいわなければならず，そうしてこそはじめて，それは国全体に共通の考えとなるのです。すべての意見を受け入れるわが党のような政党が，共通の目的を達成するために，各自の犠牲と党外における規律遵守を要求しなければならないのは，そのためです[90]。」

党の運営と管理においては，ドリオひとりが主人であり，だれからも難癖をつけられない存在であった。まったくの全能ではなかったとしても，ドリオは党規約によってきわめて広大な特権をもっていた。たとえば，ドリオは，かれ自身の決定によって，政治局に既述のような幾人ものかれの協力者を入れ，政治局をたえず拡大していった[91]。党全体を巻き込む重大な決定のほとんどが政治局の会合のときにおこなわれたのであり，したがって，政治局メンバーの選定はきわめて重要な特権であった。フランス人民党は共産党と同様な「民主的中央集権主義」の原則にもとづいて運営されたといわれるが，それは本当でもあり，まちがってもいた。実際には，この原則はフランス人民党では共産党よりもはるかに徹底して適用され，ひとりの人物，「党首」が全面的に，なんらの釈明の必要もなく，党全体を指揮した。党首ひとりが規律委員会を掌握していた。その一方で，フランス人民党では——党首の悪口をいうことを除いては——ほとんどなんでもいうことができた。魔女裁判もおこなわれず，除名もなかった[92]。

フランス人民党の発足前後に，ドリオは，かれの補佐役たちの言によれば，顕著な変化をとげた。「驚異的なほどあらたな変身」とドリュ・ラ・ロシェルは書いている[93]。ドリオの権威と威信は増大した。ベルトラン・ド・ジュヴネルは，すでに，1935年6月に書いたルポルタージュのなかで，ドリオの姿を描写して，「かれは若くて大きく，体は大型のトレーラーのようにがっちりしていて，開拓地の大規模な土木事業をやりとげた技師のような相貌をしていた。一種，的確なまなざし，勢いのある声，威厳のある動作と表現するほかない」と書いていた[94]。これにたいして，1937年6月，サン・ドニで展開された女性解放運動を指導し，『自由』紙の発行所にドリオを訪ねたルイズ・ヴェスには，かれはエネルギッシュで野心的な，「しかし教養のない」人物との印象を残している[95]。しかし，ヴィクトル・バルテレミーによれば，反対に，ドリオが相当な分野の広い教養の持主であり，たとえば，初期キリスト教会の神学者たち，キリストの12使徒のひとり聖トーマスのことをよく知り，17世紀のカトリックの司教ボシュエの熱烈な崇拝者であった。ある日には，バルテレミーとドリオは「ダンテの『神曲』の数節のさまざまな解釈について」議論したこともあり，バルテレミーのために，ドリオが「一晩中，哲学的観点からのカール・マルクスと聖トーマスの功績の比較について，魅力的な講義をしてくれた」こともあったという[96]。独学で育ったドリオは，おそらく寄せ集めの教養の持主であり，その教養の欠落した部分がルイズ・ヴェスのような一日だけの話し相手には無教養者とおもわせたのであったろうが，しかし，かれの知的才能，同化能力，知識欲は人並みはずれたものであったといってよい。

ピエール・ピュシューは，獄中で書いた回想録のなかで，ドリオの「独学者としての勤勉な教養」に言及し，「実をいうと，わたしは，われわれの世代に，すぐれた政治家の資質をこれ

---

90) J. Doriot, *La France avec nous! op. cit*., pp.123-125.
91) D. Wolf, *op. cit*., p.189, 平瀬・吉田訳, p.197.
92) J. -P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.241-242.
93) Pierre Drieu La Rochelle, *Doriot ou la vie d'un ouvrier français*, Editions populaires françaises, Saint-Denis, 1936, p.31.
94) *Vu*, 28 juin 1935; B. de Jouvenel, *op. cit*., p.241.
95) Louise Weiss, Doriot et l'agitation féministe en 1937, *Revue politique et parlementaire*, no. 813, septembre 1970, p.57.
96) V. Barthélemy, *op. cit*., pp.164-165.

ほどまでに天から授かった人物をみたことはなかった」とまでいっている[97]。ドリオの分析能力，その表現の才にたいしては，多くの側近たちが格別の賛辞を呈した。夜の会合や夕食会のあと始まるくつろいだ会話のなかで，ドリオの話し振りはひときわ機知に富んでいた。ヴィクトル・バルテレミーは，「ドリオは，しばしば夜明けまで続いた数人の友人たちとの夜の長い議論を愛していた。かれは，モスクワでの幾度もの長い滞在のあいだにこの習慣が身についたのだとわたしにいった・・・議論のあいだ，ドリオはいつも光り輝いていた。このような小さな委員会や，ときには２人だけの会話，そして，ごく身近かに感じられる夜の感覚が，いわばかれをひとりきりにさせ，かれの分析能力と同時に，ときには未来についての思いがけない洞察力をかき立てるようであった。かれのそばで，わたしは忘れることのできないほどのすばらしい時間を経験した」と語っている[98]。

それでは，ドリオはファシズムの指導者になることができたであろうか。ドリュ・ラ・ロシェルが『ファシスト社会主義』のなかで書いているような，「大衆がいつでも身をゆだねることのできる生ける神々[99]」のひとりになることができたであろうか。ドリュ・ラ・ロシェルの目には，ドリオは，一般に一国の政府の指導者に期待されるような，「国民全体の女性的寛容に対応して」，生命の力を結晶させた男性的要素を代表する人物と映った[100]。ベルトラン・ド・ジュヴネルの言葉を借りれば，ドリオの心は，「ファシズムの指導者とそのあとに従う人びととを結びつける堅い愛」と，ファシズムの本質である規律遵守の雄々しい厳しさに満ちているようにみえた[101]。

このような党首の指導の下，フランス人民党は，共産主義を阻止するために結成され，その党員を極左と極右の組織や政党から，そして労働者階級からだけでなく中産階級からも募り，フランスの財界からだけでなく，ファシスト・イタリアからも資金援助を受けた。これらはすべて，異論の余地なく，同党をファシズムへと押しやる要素であった。それでは，はたして，フランス人民党は，真正のファシスト政党であったのであろうか。

97) P. Pucheu, *op. cit*., p.139.
98) V. Barthélemy, *op. cit*., pp.109-110.
99) Pierre Drieu La Rochelle, *Socialisme fasciste*, Gallimard, Paris, 1934, p.127.
100) P. Drieu La Rochelle, *Avec Doriot, op. cit*., p.146,《Le peuple est avec nous》, *L' Emancipation nationale,* 13 février 1937.
101) B. de Jouvenel, *op. cit*., p.197.

Jacques Doriot et le Parti populaire français de 1936 à 1940. 1

Yukiharu Takeoka

La fondation, en juin 1936, du Parti populaire français par l'ancien communiste Jacques Doriot marque la naissance du premier parti fasciste français de masse. Dans quel sens le Parti populaire français était-il fasciste? Il est aujourd'hui communément admis que l'idéologie n'occupe pas une place fondamentalement plus importante au sein d'un parti fasciste que dans n'importe quel autre courant politique. La réponse réside d'abord donc dans le comportement du Parti populaire français. Dès son premier congrès en novembre 1936, son comportement apparaît comme dépourvu d'ambiguité. Par son cérémonial, par son organisation et son comportement politique, par la sociologie de ses adhérents et sa doctrine, voire par ses liens avec le fascisme italien, le Parti populaire français peut être considéré comme le seul parti fasciste de masse que la France ait connu.

Au printemps de 1937, Doriot a émis l'idée de la formation d'un Front de la Liberté, organisation coopérative anti-marxiste et engagé des négociations avec un certain nombre de partis et mouvements de droite. Mais le rejet final d'adhésion du Parti social français de François de la Rocque, en particulier, a fait échouer la tentative de Doriot. Pour le Parti populaire français, les accords de Munich, signé le 30 septembre 1938, furent l'occasion d'une très grave crise. Le défaitisme de Doriot devant la crise de Munich a causé la démission de plusieurs membres de son état-major et des intellectuels influents. Abandonné par tous ceux qui ont jugé que Doriot ne pouvait pas devenir un Mussolini français et ayant peu à peu perdu l'appui des masse et, surtout, du milieu des affaires, le Parti populaire français ne représentait plus qu'une force marginale, de plus en plus nettement rangée à la droite traditionaliste, à la veille de la deuxième guerre mondiale.

Classification JEL: N44
Mots-clés: Doriot, communisme, fascisme